私たちの建設

宫本百合子

青空文庫

長

い旅行に出発する前には、

誰でも地図を調べる。それと同じように、

私達が偉大な建

封建の世界

実を蔽われ 実を語ってい 合理的であるかということについての見透しは、これまでちっとも与えられなかった。 生きたか、 て育て上げ、 に是非必要な日本の社会の歴史及びその歴史の中で、 これまでかくされていた自分たちの力を発揮することの出来る時代になって来た。 占める日本の婦人も、 のために、 つけても、 言葉に云いつくされないほどの犠牲を通して、 社会はどういう筋道を辿って今日迄来たか、随って、 今日私達が残念に思うことは、 自分達で判断し行動することの出来る時代が到達した。 ていたかということは周知のとおりである。 る その発展を担って来た人民である男も女も、 歴史がほとんどないことである。 過去の重い軛から解放されて、 わたしたちが勇気をもって明日 これまでの歴史がどんなに歪められ、真 日本に初めて、 女性が負うていた役割につ 明るい希望のある社会建設のために、 日本の社会を自分達の勤労によっ 自分達の祖先がどのようにして 未来はどう発展するのが 人民が自分の幸福の建設 そして全人民の へ歩み出 半数を それ すため 事

極

8

て意義深

い

と思う。

設 の道に発とうとする時、 過去の歴史を正しく明瞭に理解 自分達 の実力を知ることは

てゆ を継 の氏 大神 者た そこでその岩屋の前で集会を開いて、 利を持ってい おそらくその頃 機を滅茶滅茶 まだ総て いうも 日 天照 ちが く家事との上で、 承 族 は 本)のも、 す 内 古 0 の生 代日 政治 大 Ź 0 女性 神 母 権利を持つてい 定しし 方の た。 が 文献 本 的 産手段とその収穫とを共有 0) 機を織 0 0 に 歴 住居 子供 利用 史は、 てしまったという插 社会にお の中に多勢現 つまり男も女も等 どれ って は、 して、 でもあった岩屋にとじ籠って戸をしめてしまっ 先ず た。 先任 程大切な役目を持っていたかということを証 いて、 いたらば、 神話 宗教的崇拝の中 このことは、 0) わ 酋 れ の中に現わ Ũ 人の女酋長であった。 長が男であろうと女であろうと選挙され 7 話が 素戔嗚 () 何とかして女酋長の機嫌を直そうとした。 い選挙権と被選挙権とを持 る。 して **、ある。** もうその頃から女の力が、 この時代は母系の制度が行 いた時代で、 心に置い れている。 尊 き 女酋長である天照大神は が たが、 暴れ込んで、 天照大神という名は、 氏族の 日本 現実に歴史をさぐれば の石器 って 中では男 馬 た。 の生 V) 時代 たし、 明 わ 産業と毎 それ の氏 神 皮を投げ込んで U れ も女も れば 々 T 7 は を憤 後代 (,) 1 族 女 た。 その時に、 平 社 閉 \exists そ 0) 0) 酋 等 って、 を生き \Box 0) 支配 地 長 Ò 神 天 話 位 つ ع 権 照

それ り、 女酋 氏 0) の ため う物語 踊 族 長が をと i) 中 恐らく に は Ò 自由 ちょ V) _. で 人の女であった 氏 は あ ŧ 族に 野に , , る。 な 7 と岩戸を隙 創意を働かすことが て見物 重大 これ 食物をあさりもし な問題が は天照大神が女の U 7 : 鈿 女 命 か 1, る神々 したところを、 起っ が笑いどよめいた声に 出来たという当時の社会 た時に、 た実際の働き手であったことを物語 が頓智を出 **酋長であっ** 後世 手力男命 iして、 のような偏見は持たれず、 たと同 極めて陽気な 時に、 が岩を取り除け 誘 わ の事実をも れ その て、 好奇 氏 「たたら舞」 語っ つ 族 7 心を 0) 7 てい 女が 1 中 連 動 で れ そ は か 出 をした。 0) 機 され 鈿 たと 解 女 É 決 命 織 た

は失 としての、 て自分に従え、 行う耕作を憶え、 して労働させられ、 奴隷 わ 固定 財 社会的な在り方が根をおろしはじめ、 て来た。 原始社会の生産が次第に進んで、 してつれ 産 労働させるようになった。 の主人である男の父権が確立 鉄器が輸入され、 男の て来られた他氏 婦人の 所 地位というものは 有ともなされた。 氏族間 族 の者の中には勿論女も交っていて、 それにつれて、 . の 闘 この時代から女性は男子の権 1 して女子はそれに従属するも 日本民族は次第に一 つか変化 11 で、 歴史と共に極めて多様な形で変化しなが より して来た。 強 個 人の富というも い氏族が 定の土地 太古のあどけな 弱い それ 氏 に 力に のとなり Ō 族 が 定の方法 服するも は を 女奴 段 奴隷とし ĺ い 々 増大 平 Ō Ø で

ら、 殆 んど今日 「 ま で、 なお本質は継続して来てい る ので あ

探し 才を 妃、 に の どういう風 ち つも 11 の作 固 本 わ 藤 持っ 名は とり 中 有 7 れ 原 宮 も、 品 7 時 の名を記されてい 何子 などになった人達ば 7 出され 代 で 1 V 紫式 あ る。 に生きて た清 で る。 西 部 あ 7 世 暦 界に けれ 少 つ 0) 1 十 名前は 納言に た 7 る ども、 誇る の たかといえば、 源氏 世 る 紀 か 物語 のは、 日 してもそれ 分らな は、 本 か 何 これらの卓抜な文学的収穫を残 I) 姬 にしろ、 の古典文学といえば、 で \ \ \ 極 で \exists あ あ 本 < る。 ·少数 は っ 藤 それはまことに儚い ^{はかな} の文化史の 同 枕草子、 た 原某の娘であったということが分るだけ の、 じである。 0) か、 藤 中で、 栄華 原氏 決して記録されてい それが 直 この時代の 物語、 一系の 最 も女性の文化が昂 娘たちだけ 生であった。 その たっ L た婦 他総 歴 た 史 人達が つし 0) な てこの で、 上 1 どんな文学史を に か 父の姓ととも 当 時 な 揚 あ 11 ず 時 代 0) 11 で、 よう た ような天 0 0) 社 時 も皇后、 婦 彼女 会で 代と た

ちの け \mathcal{O} ħ 時 藤 身辺を飾り宮廷社会の陰険な競争に対してよく備え暗黙の外交的影響と文化の ば 代 原 中 か 氏 5 宮として、 は、 宮廷 自 分 丙 0) 血 娘 0) あら をとお たちを天皇 и́ Ź L 7 隅 0) 々 家 ま 母親としようと努力して来た。 で 0 権 族 力を扶植 の権力を伸張させるために、 して来た。 その必要から、 皇后にする 抑もそも か、 自 分 藤 力で、 さも 0) 原 鎌 足

背景 めば 宮中 娘 7 1 工面をして、 又そこから脱出しようとして、 の社会に生きる女の Ñ る。 の勢力を確保するために才智の優れた、 た姿は、 も 0 権 当 時 そして、 人気を集注 袔 藤 も 原 の宮廷内の無為と遊楽と権力争 源氏 無 せめてその関係に安定のある配偶を見つけようとし、 氏 | 専横 紫式部という官女名をもっ 1 物語 ままに、 の当時、 生が、 0 社交的なあらゆ 「雨夜のしなさだめ」 どんな不安な身のゆく末を思い 中流 どんなに頼りな それぞれの才智に応じて、 の女性が、 る場 た一 (V 面 性格にも特色のある婦人達を官女として集め、 父親の家に い気の毒なものである の事情が実に細かく色彩ゆ で勝利を占めようとして来た。 にも窺われる。 人の優れ あって経済的 た真 **,** , 煩わなければならな ろいろと進歩 面 目な 心 か 或は宮廷に入ろうと努 な基礎もなく社会的 ということを痛感 0) 婦 たかに描写され の機 人作家は 源氏物語を読 か 会を捉える つ た か 当 蒔

確定 につ ら、 藤 れ 各地 になって来た。 原 下級官吏達の生涯は、 7 時 代は、 荘 0) 園 大荘 の管理者が収穫をごまかしたり、 支配 園は、 階級 男子の任官というものも、 その土地に住む管理者によって管理されていた。 の経済 始めから終りまで不安定で、 の基礎は、 荘園 農民 全く藤原氏 制度であった。 「の疲弊が甚しくなったり 一旦藤原氏の機嫌をそこねたら、 の権力者のお手盛りで 藤原氏は今日いう不在 が藤 原 7 末期 財 あ ったか に 源 地主 は な る 不

任官 も覚束ない者が多かった。 年の始めに、 任官発表が ある毎に其 々の 家 の婦

衣、 喜び、 人達が着る 荘 園 それらは には、 歎きした。 ていた七重 少女から老婆までの女がどっさり奴隷として働かされ 皆荘 沢山 園 八重の唐衣 の歌や日記 の女奴隷達の指先か 藤原氏 の中 に、 の紳士達がたい ら生み出されたものな そのときの思いが語られ ^ ん温 V のであっ ものだと珍重 7 7 7 1 た。 藤 Ū 原 て着た綿 氏 0) 貴婦

第一、 な庶 支那 の庭 を着て、 の日本全国 いるように沢 て生活 藤 原氏 民 の詩を扇にかいてさざめいていた時、 へまで入って来るような極端な貧しさの中で文盲であっ 0) 絵巻を見ても分るように、 女達は、 殆んど裸足で働いて暮した。 族の貴女の生活 <u>川</u> 或は 0) 京都 迷信や鬼の話や、 自分の名も知らず、 0 般 は、 の庶民 そのように不安定な土台の上に絢爛と 庶民 人とさら の女の生活というものはどんなであ そして京都の辻には行倒 の女は髪を藁 稭 自分達の働きの意義も知らず、 ζ, これらの謙遜であるとも知らぬほど の話などのうちに耕作し、 や紙で結え、 た。 れ 紫式部達が が絶えず、 染色を使わ 咲 今昔物語 紡ぎ、 っ V たの 7 物語を書き、 V 女乞食が宮廷 たが、 織 謙 に だろうか 現わ 遜 な (,) で 当時 勤 着 勉 物

藤 原時代は武家政治の時代に移った。 政治の主権は藤原氏から足利に移りやがて織田信

長の時代になって (西暦十六世紀) 日本では、 封建社会が確立される一歩をしるした。

豊臣 秀吉を経て、 徳川家康から家光の時代に、 日本の封建制度は全く動かな , , ものとな

り、明治に至ったのであった。

的な利害に従って、 政略結婚になって、 させられて、 ることが 屡 々 珍しくなかったし、 武家時代、 自分だけが実家の軍勢に囲まれた城から、 婦人の生活は全くその父兄達の、 夫婦 いじらしい婦人達は、 の情愛とか、 愛する男の子は敵方の血すじを保っているからと棄て 母子の愛情は無慙に蹂み躙られた。 あの城主からこの城主へと、 戦略の便宜に支配された。 甲斐なくも救い出されるという悲 夫を換えさせられ 結婚はすっか 兄や父親 の政治 1)

劇も頻出

世にそれ 女主人公達は、 ろこびが反映していないだろう。 って現われる女達は、 武家時代に完成された文学の一つの形に謡曲がある。 を訴えようとして現われた人達である。 総て何かの意味で挫折した愛情の故に狂う哀れな女人であるし、 みんなこの世では果されなかった衷心の希望に惹かれて、 無限 の女性の歎きと怨みとが、響いている。 謡曲文学の中には、 何と生きるよ 再 幽霊とな の

面白 いのは、 この時代の貴族的な文学であった謡曲に対して、 もっと庶民的な源泉をも

う殿 あっ の生 な殿 時 時 犠牲とし 達 って創られ に に 0) 武 たと (家貴: 悲 当 活が、 は 生活 0) と、 晴 劇 時 妻君とが 族の 7 れ 的 力を示す貴重 0) 頓智と狡さと精力に満 う事実 社会 1 な 文盲ながら幾らか 晴れと亭主を尻 た狂言 たの 生活 亡霊的存 :現わ の に反 を示してい が V 0) わ 婦 れ 存在していることである。 して、 人を愉 ゆ て、 在と較べて、 なものである。 る にも敷 下 短 る。 明るさ、 1, 層者には、 より政略の しく又苦し ちた太郎冠者と、 太郎 簡 1 明 7 その感性、 これらの狂言の な 冠者はそのチャンピオンとして登場 健全さを持っていたことを、 , , い勤労 を を とっこく 筋 る。 支配階級に対して皮肉な大笑い の運びのうちに腹からの笑 狂言の行中 の少 から全く引き離 行動 狂言は、 相当やきもちの ĺ١ が 中 下 1 級武士や庶民 に 日本 に か は、 出 に 現するが のユー も U 1 現世的で 強 て、 つも 狂言は 女は、 モアの健全さ、 1 生活 少し 1 をし あ か を 時 **して** 語っ 誘 魯 り、 0) も完全に に 謡 T 中 は 鈍 1 曲 1 7 で 1 出 腕 腕 0) で る は る V 力 お 白 女 感情 政 を 主 0) る。 7 で で Ē ょ あ 女 略 1 り、 あ 性 揮 公 か も 同 0)

た。 来た鉄砲をどっさり買い込んで、 戦 織 玉 田 時代にこうし 信 長は当時の て一旦崩れ分散した支配権 群雄 たちの中では、 自分の歩兵を武装させ機動的な戦争の方法を組 誰 ょ 力は、 りも早く新らし 信長によって、 V) 戦術 を輸 或る程度まとめられ 織 種 子 た 島

った。

喪い、 は、 のは らであった。 信長であった。 彼 窮乏していた天皇の の賢によってであった。 そし てその統 信長が、 こに、 族に経済的援助を与え、 分裂していた支配権力を一応自分に集中することが出 彼がポル つ の有利な条件をつけるために、 トガル か ら渡来した近代武器 旧藤 原 族の権謀慾をしずめようと 京都 の威 にお 力を理 1 7 解 一来たの 政 た 権 を か

た。 の反抗 実権 これは秀吉の時代にも自己の権力の利益を護るために踏襲された方法であった。 の口実を防ぐために、 主権を武家に確保するために、 天皇一 族に対する給与ということが考えられてい 公家と武器と領地と領地 の農民を背景とし たのであっ 政治の た僧侶

な存 に、 た規模壮大な一人の英雄である。 秀吉といえば、 在 専制 も あり、 的 な君主らしく一人よがりで気ままであったこと、 一方には千利休の娘に対する醜聞なども伝えられてい 桃山時代 (西暦十六世紀) そして、 その感情生活も性格から来る不羈奔放さととも という独特な時期を文化史の上につくり出 伝説化されて 1 る淀君

うことが寧ろ当然の慣しであった。 当 時 の社会では、征服した者が権力を以て征服された城主の婦 日本の女性史の中で淀君は我儘者の見本のように語ら 人達を意の儘 にするとい

のが 秀吉 呼ば でい れ い時代か の微妙さはふきとばして、 つの復讐であった。 7 あっ いる。 責任を負う気持が が る れ 恋着した た のでは 5 たろう。 少女の淀 U が 彼女の心に根強く植付けられていた なかろうか。 母 その秀吉の愛情を独占するということは、 君は、 の美しさを匂うばかりの若さのうちに この半ば誇張された伝記の中にも、 淀君は殆んど分別なく我意を揮った。 なか 美貌 彼女を寵愛した。 淀君 つ たのも当然である。 の母と共に秀吉の捕虜となって育 の母: 可親は、 秀吉に敗けた柴田勝家 錦に包まれて暮しながら、 「猿面」 ・ 髣うふっ 案外私共の注意すべき点が 秀吉に対する軽 豊臣家の存亡ということについ とりも直さず女性としては させた。 った。 の妻であ 彼女 お茶 年齡 蔑は の美 う た。 々 0) と 相 しさは、 お茶々 異 根 や境 深 ひそん つ 1 た 昔 ع も 稚 遇

れ の 日 た。 らゆることに恐ろしい懸隔があったことが分る。 た城 たかといえば、 悲 |本経 余程 劇と喜劇とが錯綜 0) 泳年、 中でさえも、 済 定めの中 豊臣家に仕えていたものら に 冬でも僅かに麻衣を重ね つの 女主人公と使われる女達との間には、 して、 插話として書かれている。 日 夜運行してい ていたに過ぎないということが、 Ū い。 た大坂城の中にお菊という一 ところが、 そうして見れば、 着るものから食べるもの、 このお菊がどんな生活をし 当時 人の老女があっ 竹 最 越与三 ŧ 華美とさ 郎氏 あ

はそ 女中 維 の 持 徳川 女性としての本性を踏み躙 ,の努 0) あ不 .時代に入って封建制は確められ、 ために遠島 自然な生活から来る破廉 稗史の中でも徳川 力とそれ を続く 0) 刑にあ る野 っ 心あ の大奥というものは伏魔殿とされた。 た。 った性的関係に置か る諸家 徳川 恥 な行為とは、 時 の闘 代 士農工商の身分的区別も確立した。 . の 1 婦 は、 人達はやはり権謀術 れ やはり女性をさまざまの形 画家英一蝶に一 たのであった。 枚 沢山 数 0) の隠 諷 の手段として、 刺 画 れ を描 徳川 た罪 で そ 悪 氏 0) か せ、 仲 0) ح 人間 御 権 介 彼 殿 物 力

る。 命令は 騎士時代 のがどん とは興味があると思う。 ここでヨー サー 絶 のヨ なに無視され、 対であった。 王やランスロ _ | 口 $\dot{\Box}$ ッパ ッパ 0) そこから美しい悲し 女性の生活は、 封 ットの物語によって伝えられてい 建時代 Е | また警戒されていたかということは次の興味 口 ッパ の男女関係と、 の封建諸王 本質においてはやっぱり無権力なもので、 ر ر 口 日本 マンスが生れてい の時代は · の封 るような騎士気質が支配 中世 建時代のそれとを比較して見るこ の伝説に現わ る。 ある物語で 女の自主性というも れ てい 夫や兄の も知られ していた。 る通り、

そして難題をかけられた。 騎 士 の一人にガラハートという勇士があった。 その難題というのは 「女が一番この世で欲しがっているもの 或る時森で悪魔的な巨人に出合った。

件であった。ガラハートは当惑してあちらこちらと彷徨った。 は は はやさしく真実な騎士の愛情であろうか。とつおいつしながらまた別の森に来 すると樹の間 ートに呼び 何 何であろう。 か」ということで、その答を日限までに持って来なければ果し合いをするという条 かけた。 から赤い着物を着て、恐ろしい顔をした一人の女が出て来た。 大金持の夫であろうか。それとも無類に美しい容貌 女が の夫であろうか。 一番欲しいというの そしてガラ か か つ 或

たにも似合わな 「ガラハートよ。 [] あなたはなぜそんなに沈んだ顔をしていますか、 日頃の雄 Þ ٧Ì

ら大変仕合せです」 「どうも困りました。 ガラハートは親切な言葉を感謝して、 いくら考えても私には見当がつかない。 自分のぶつかっている困難を打ち明け 若しお智慧を拝借出来た

すると、赤い着物の恐ろしい女は答えた。

ら、 「心配なさらないでようございますよガラハ 答を与えて上げましょう。 女がこの世で一番欲しいと思っているものは ١ ٢ 私はあなたの武勇を崇拝 している **「独立」** で

す

そういって女の姿は消えた。

日限が来た時ガラハートは勇んで例の森へ出かけた。巨人は恐ろしい武器をひっさげ

て待ち構えている。 破鐘のような声を出して呼びかけた。

「やい、ガラハート、 難題はどうした。とても返事は出来なかろう。 お前の命も今日き

りだぞ」

ガラハートは落着いて「まあまあ急ぐな」といった。

「返事は用意してある」

「言って見ろ」

「女がこの世で一番欲しているものは『独立』だ」

すると巨人の顔色が変った。

「畜生、とうとうお前は本当のことをいい当てた。しかし、 人間の男に、その答えが分

る筈はない。誰かがきっとお前に智慧を貸したに違いない。 言え」

なぐった。「ああ、 合って、その女が智慧を貸してくれたことを告げた。巨人はさも残念そうに自分の腿を ガラハートは清廉潔白な騎士であるから、森の中で、赤い着物を着た恐ろしい女に出 あの畜生、それは私の妹だ。何年か前あの女をひどい目に遭わせて

森

0

奥

退

11

7

行

つ

た。

向

っ

そして彼女達のために音楽を奏し、

狩猟の

お供をし、

奪掠者

から彼女達を護

った。

追放した。 その怨みを今日晴らしたんだ」 非常に落胆して、すごすご武器を引きずって

達の前に これ は 跪き、 中 世 0) 騎 その手 士伝 に接 説 の中で圧巻的なエピソードだと思う。 吻 その人の身に着い たものをマスコットとして試合に立 騎士達は礼儀正 しく貴婦

けれども、 今日でも婦人に対して、 婦 人の社会にお 礼儀と節度のある行為を、 か れ た地 位 の本質は、 このガラハ 騎士的なという表現で言わ] 1 . Ø 諷刺的な物語が れ 7 示すよ

うなものであったことは疑

1

ない。

ら、 在し 自分の愛 物ともされたのであった。 Ξ 妻の] たのであった。 口 の 中 貞操を賭物として、 ツ 純 世 パ 中 潔と夫への忠実を守った。 の女性達は女としての奇智の限りを尽して、 世に それは武力的な闘 おける婦 騎 士物語 破廉 人は、 恥な友人の道徳的なテストに可憐な妻をさらす物語が 飾 の中には、 りな 争 の賭物とされたばかりでなく、 い言葉でいえば男子の闘争の 夫である一人の騎 非道な奪掠者と闘った。 士が、 道徳的 友達との張 鹵獲品とし な 闘 争 合 そ 0) 11 少 か 賭

このようないきさつは、

日本の中世の武家社会にやはり少くなかった。

例えば袈裟御前

の物語が ·ある。 人 の武家 の婦 人がが 生命を賭さなければ、 自分の貞潔を守れな か つ た当時

の男の暴力を物語っている。

経済を本質的に大坂 封 7 建 , , 徳川 領主 る して利をとりやがて集めた米を土台に相場をして、 商 0) 達が 中 人が 葉 領地 巨大な富を蓄積 から日本 の農民から取立てていた米を廻漕 0) 商 では 人が掌握 町 しは 人階級が勃興して、 じめた。 しはじめたことで増大して行っ 大坂がその中心地 身分制度においては一 し、 その 政治的には支配者 収穫と収穫との間 となった。 た。 番低い 大阪 で あ 商 っ に ものとされ 人 た武 金 0) 富は 銭 士 の 立 0)

の労働 肉体 言う家畜という有様 主張をもっており、 農民というものは、 的労働とで働き続けて来ていた。 歌 素朴 あとは皆地 な言葉の間 紡ぎ唄、 頭 その主意によって統治を受けた。 であった。 この 田 に脈 領主に 植 長 唄、 々 1 とした訴えと憧れとをふくめてい 粉挽 しか 取られて来た。 歴史の間に殆んど変化のない程原始的な耕具と、 の時に歌う唄、 しこの時代 徳川 の標語は 農民の女性の生活 の彼女達の生活が文化 茶つ 「殺すな、 やっと生活出来 る唄、 年に一 生 とい かす 、うも 度の な る程 の上に残 のは、 盆 度 という一 踊 の 収 i) した各地 Œ 入だけ 最大限な 全く物を 歌う 貫 した 幀 É 方

万葉集には、 名もない防人の歌、 防人の妻や母、 遊行婦女の歌なども、 有名な乞食の歌

の

反

面

に

証

拠

だてて

7

いる

0)

で

あ

る。

化は、 民 ことは、 などと共に集録されて今日に伝えられて 0) 婦 人の す 支配 っ 生 か 活 I) 者の文化がどんなに崩 の苦しさやひそかな 般 人 民 0) 内 面 生活 歓喜 れ から遊離 や の思い いる。 す V して、 社会的基盤 けれ を反映する歌 ども、 文学的な集というようなも に <u>寸</u> 藤 も物語を 原氏 つ 7 以後、 1 も残 た か 上層 U ということを、 7 **(**) の支配 な 0) 11 は 者 そ 0) 文 そ 0) 庶

帯 の示 然で ほ 西 の夫人達に対抗 に 鶴 か か うことが、 徳 商 あっ ΙΪ 威 も 珊 人 のどこに示すことが 0) 運 経 0) 瑚 短 0) ぞっつ 済 たと思う。 政 篇 擡 動として妻や娘を飾 府 0) 小 頭 ĺ, 中 につ こまごまと書か 説 はたびたび贅沢禁止 して、 枢 0) 中 れ 珍ら では 社会的 には、 て、 権 庶民であるが故に大袈裟な物見遊 出 力 1 商 者 に最 来たろう。 舶 大坂 人 れ 0 り立てずにはおられ 0) 来 や江戸 も身 咽 7 0 婦女達の生活程度というものは、 吳絽服: 喉 0) V 分 る。 命令を発 元を握って 結 \hat{O} , の 低 金銭 大 局 綸 物質的 1 0 商 Ū 出 ものとされ、 丸帯をつくり、 人の妻や娘が、 たが、 納細 V) た 商 なかったろうし、 な実力を誇る 目 帳のように 人達は、 命令は実行され 山の行列もつくれるし、 斬 どん I) 高 自分 U 捨 価 物質的 まで書 か 7 な なに贅を の意思、 な 御 妻達 頭 か 免 な 飾 の立 も つ か か 1) に大変化 たし、 極 1 つ れ を わ 自 場 た。 7 め 定置 < ゆ 分 V た 芝居見物 そ そ \mathcal{O} つ 服 る大名方 れ た 装 0) て来た。 権 か は か を 力を、 当 つ と

も出 来るし、 贔屓役者と遊ぶことも出来るし、 贅を尽した身装を競争することも出来ると

いう特権を味ったのであった。

は、 女訓 それらの家に属する女として存在するばか 丁寧に教えている。そうして見れば、 という有名な本を書いた。 て三年経って子供を持たない女は離婚してもよいと。 は男よりも遅く寝 明するも 益 こういう物質的 益軒が女大学 軒 女は を研究し が 流 L 0 女大学の か のではな 布して、 三界に家なきものとされた。 ŧ ているのである。 その彼女たちのものならぬ 主張 の中でい 貝原 かった。 7 な女性生活の富貴は、 男よりも早く起きなければならない。 益軒 しているところは、 この本の中で益軒は智慧をつくして、 かめ この時代に日本 の女大学などが出た時期であった。 熱い しく規定しているような辛い条件で過されたのであった。 風呂に入るなということから、 当時の標準で、 娘の時は父の家。 しかし立入って見れば彼女達の曇りない幸福を証 いりで、 誇張でなく奴隷としての女のモラルである。 の一般社会には女性に対する支那伝 「家」 の経営のために、 彼女自身の家というものは認 いくらかは医学の知識も学んでいた 一方においてこの益 嫁しては夫の家。 益軒は主張してい どんなに美事 男が長生きをする養生の 性生活にわたるまでを 三界に家なき女の一生 軒は 老い に着飾 めら ては 来 『養 Ò 結婚 れな 生 厳 子 ろうと か家。 女 か

目的

に反する全責任を、

女に投げかけているのである。

を継 に通 責任 食が守るべき女の規則として提出されている。 のだろう。 分守られ保護され いうことさえも無視し じな 承する男の子を生む者としてだけ女を計算した封建家族制度の立場は、 でないことを理解 い男でもなか それに もかかわらず、 なければならな してい て ったらしい。 1 る。 、 る。 子供を持つためには、 益 女に向うと益軒は、 いという事実さえも無視している。 軒 U ö, か 性生活に対する注意事項を見れば 封建的な家というも 今日、 少し常識あ 女の 女が 生理的 男よりも弱 るも ない め に女を隷属 そし ろい のは い体を持 不姙 ろの 7 男のそうい そ 睡 が 条 って させて、 0) 眠 間 女 不 件 だけ が、 の消 ると う 家 息 0) 粗 +

質的 もの れ 彼 劇的な終結を持たなければならなかったかということを、 Ó の社会的な理由から、 徳 女大学が繰返え 作 ĬΪ な 価 品 0) 値は、 末 むき出 は、 浄瑠璃として作られた。 日本文学は興味ある変化を示した。その一つに、 この しの人 し読まれたのは、 封建 、間性、 現実に益軒 の社会の中に ヒュ] 中 マニティーというものがどのように葛藤し、 のモラルは蹴飛ばして生きていただろうと思う。 流 あって封建のしきたり、 日本文学史の中で、 の武家階級であったろう。 近松の作品 曲節をつくし、 近松門左衛門の文学が 道徳観 貴族と町人とはそれぞ が 持 身分制などという って 雄弁に物語って いる最も ある。 悲 本

いる点にある。

える 愛情 愛というものは、 組の男女が、 で実現されなかった互いの結合を全くしようとしているのである。 は肯定するところまで、 らゆる人の心を魅 された男女関係の 当 男女の歎きと愛着とを、 時 の貫徹のために、 近 松 の題材となったような相対死 自然のままに自分達の感情を伝え合わずにはいられない 悲劇も多く現われた。 まだ自覚されていなかった。 した。 社会の枠を自分達の力で破壊して行く努力、 当時 社会の身分の差別はどうあろうとも、 七五調 の人間性の本能的な理解が拡が の極 近松は、 めて情緒的な、 (心中)が非常に現われた。 憐れな二人は最後には死ぬことで、 この世の義理に苦しみ、 感性的な文章で愬えて、 って来ており、 偶然の機会から相寄 そのような建設的な恋 又 ということを、 Ņ 社会 しか わゆ 0 ŧ 当時 制 Ź この世 う 裁に 不義と その た 一 応 0) あ 怯

では どんな卓抜な文学的天才でも、 性とがなかった。 主人公達の苦悩と死に方とを、 近松は、 あってもまだ身分の差別はきびしくて、 文学者として女主人公達と共に、その生き方の限界に自分を止めた。 このことは近松の生れた元禄の時代が町人の擡頭と武士階級 その人の生きる時代の歴史的な重みというものから、 もう一歩生きる方へと導いて行くだけの社会的覚醒と自立 封建の外郭は堅かったことを反映 してい の崩 近松には、 壊 その 時代

自分達 つけ、 作家 個 当 人だけで完全に解放され によ 時 の婦 手 0 感情 紙 っ をか 7 人達は 描 0 奥底に くに不自由 か れ、 浄瑠璃として又は芝居として、 そし ある響きとして聞きもし、 て謳 切らな しな 1 わ 読 れ いということを証 た。 み書き算盤の低 U が し、 当時 見もした。 近松 明 V 範 の婦 そ 囲 の描き出す哀感に満 に 人 婦 止 の文化的 めら 人はこのようにし れ な能 7 1 た 力 らた世 か は ら、 て男子 日 常 そ \mathcal{O} 0)

1 け とを要求されるような精 たので あっ 小 説というような、 神 上 0) 社会にご 労作は、 対する客観的 封 建 の 数百 な 年 間 眼 \exists 自 分 本婦 0) 生活 人 0) に対 可 能 か する省察 5 奪 わ と 洞 れ 7 察

禄時

代には、

辛うじ

て俳句

が世

界で.

加賀

の千代、

そ

0)

他数名の優

れ

た

女性

達が

現

わ

れ

た。

家時

代

か

ら

徳

 \prod

0)

全時代を通

じ

て、

日本には

婦

人作家というほどの

も

。 が

出

な

か

つ

元

雑な

時代

に生きる自分たち女性自身

の描き手としての

婂

人作家は

人も

出

7

11

な

11

武

複

帖

0)

に、 の 八五 ル 徳 徳川 Ш 0 サン 政 の完全な鎖国政策がはじまったことである。 日 権 スが 本 は次第次第に揺ぎ出 0 起り、 歴史を見て、 近代に向う豊富な社会生活と文化とが発生し 深 した。 い驚きにうたれることは、 遂に黒船に脅かされ最後 Ξ] 口 ッパが、 Ξ] の崩 口 ツ パ 壊 まだ蒙昧な、 はじめ に の兆を示した お た 1 7 度そ 半ば 文復 0) 野 頃 興

層が あっ 7 蛮時代の生活をしていた十一、二世紀に、 口 ツ V 経済も全くおくれた土台のまま封建社会の生活に過して来たのであった。 رُرُ 小さく安全に自分の権 が その後急速に近代化した三、 ところが、 従って、 当 肝腎 蒔 の世界で、 の近代の黎明 力を確保しようとして、 日本は確 四世紀の間を、 である かに支那に次ぐ文化の先進性を持って 日本は既に藤原時代の社会生活と文化とを持っ ルネッサンス前後に 厳し 日本は全く孤立 ٧V 鎖国政策を執 (十六世紀) して、 つ たた 独 めに 善 日本 菂 V の支配 に た 生産 0) 日 で]

も

矛盾 に関 かされつつオランダ貿易を通じてチラリ、 全く無縁 人階級の文学としてそこでだけは武士の力がものをいわぬ遊里、 人の向学心も承認され \Box 徳川 から、 ッパ 心をよせ、そのためには生命を失いさえしなければならなかった。 中葉以後、 し 退 た い え い であった。 0) 重 文学上には、 商主義的な商業の大発達、 町 封建日本の知識人たちは一部の勇敢な人たちだけが、 徳川 人 て、 階級が勃興 . 末期に到っては身分制に属しながら実力はそれを凌駕 種 スペインのコルドワ大学には数人の婦人学者も生れ の無常観、 したといっても、 俳句において代表されている ハンザ同盟、 チラリと覗われるようになった近代 それ 諸大学の設立、 は先ず、 花柳界遊蕩の文学が発生 イタリーを中心としたヨ 部分的ではあ 「さび」 国 内 徳川 の社会事 欧 の禁 た してい の感覚など 州 事 情とは るが婦 止 0) る 情 知 に 町 識 脅 0)

であった。

した として見られた女性も、 のであった。 この種 当然あそびの対手としてしか、 の文学の世界では近松 の作品にあっては 美も情感も認められ 人間 性 の悲 得 劇 な 0) 女主 か つ た 人 0) 公

明治開化の明暗

の進 発展 められた。 である伊勢の神宮に、 もっていて、 を持っている文部省でさえも創設されたば った。 明治は、 歩主 しようとした欲望には、 常識を広め、 当時 義者、 明 日本が 0) 先ず 進步 治 或 0) 的 新 は合理主 初 『言海』 輿論 な 期 L V 真に尊敬すべき何の実体も蔵されていないことを証 人 における社会の革 々 誕生を以て近代世界の中に歩み出そうとする激し 0) が、 義者であった。 という字引を出したりした。 担い手となり得る人民の文化を導き出そうという熱心な意 真実が籠って 腐 れ 果てた封 新的 彼は かりには、 **,** , た。 建の な動き方は 伊 勢の 例えば今日常に保守的或 殼から脱け出 本当に日本の 神宮へ行って、 文部大臣であった森 日本の歴史に未 して、 人民 伝統 新 の間 U 的 は 曾 明するために、 1 い希望を以て始 な 有 に文字を普及 反 日 有 迷信 礼は 本人 動 0 的 も とし な役 0) 0) 中心 図 で を 割 7 あ

時に、 故に 御簾をステッキの先で上げて天罰というものの存在しないことを証明 暗 殺されなければならなか は っきりと反動的な政権として国家を統一する方向 った。 なぜならば、 当時の日本の支配 に 向 つ たからで した。 権 力は憲法発 あ 彼は進 歩性の 布 と 同

権時 湘 ってい えも伝ってい 平等を唱えて日本全国を遊説した。 は必ず男女平等を考えた。 由党というのが これと略同い (明治十) 煙 憲法 代の (岸 発布 た時代、 -四年) 田俊子) 政治運動は、 以前、 る。 じ時代、 組 に結成された自由党の人々 その先頭に立 織されていた。 岡山には女子親睦会という政治結社が出来てあったし、 封 福田英子などという当時二十歳前後であった婦人政治家たちが、 建 一方に婦人の政治活動が盛んであったと共に、 0 たくさんの婦 重荷を脱して新し 政治上における男女平等の権利及び義務の観念に立った自 ったのは板垣退助を首領として自由民権を唱え、 その指導者は成田梅子という人であった。 大阪などでは少女が、 人政治家を、 であった。 V 日本の社会を作ろうとする気運が純粋 その活動に吸収 自由民権というとき、 政壇演説に出席 じた。 女子教育 例えば 仙台には したとい 当 時 もアメリカ 有名な中島 八 の 日 八 に高ま 男女 由 本 民 年

東京の明治女学校そのほか仙台、 教師 たちの指導によって、 やはり男女平等を水準として開始された。 横浜、 などに、進んだ女学校が開設された。 京都 それらの女 0) 同 志社

どの 学校 全体 歩 な 活 あ メ 1) み 0 動 つ が では 続 勉 で 的 力 決 強 けることが あ な 今 日 留学 して つ 婦 今日、 をし 全く男の た。 人 今日 は、 た。 0) 私 若 明 明 出来 後に 学生と同 0) た U 殆ど皆この 治 治 ち \exists 木 0) 几 本が 年 津 0) 先覚的 難を見な たならば 前 田 したり に 英学塾を設立 じに直接英語 前 な婦 あ そ V つ 後 のように ·上流婦: で、 ただろう。 日 人とし 本 11 に わ 民主化され おけ て我 U ゆ 人でも男に L の教科書を使って、 て歩 Ź た る婦婦 明 々 津 も み 治 に 田 し、 7 出 伝えられ 梅 人 0) V 劣ら 0 開 そ U 子が、 諸問 た 0) た男女平等の道 化 に 道 期 な が に、 てい 相 題 7 六つの歳 英語 違な は、 可 般 能 進 る どん 歩 丰 教 で 的 ij に岩倉 数学、 あ 育 なに を、 つ な教 ス の 基 た \vdash 教 礎 0) 変 正 育を受け 具 地 理、 な っ 直 関 を 視 持 ら た に 係 0) 今 日 現 \mathcal{O} 歴 0 行とア 時 多 本 わ 日 た 史、 れ ま 人 < 代 が 民 を \mathcal{O} な で 々

割合で つるブ 0) 基 日 礎などは 本 その土 ル 過 7 0 据えられ ジ 去 明 日 治 0) 一地は、 維新 ア 封 革 封 建 的 た。 建 命 とい 诗 それぞれ なものをそのまま 0) 例え うも 代 ようであっ 0 ば 制 のは の小さい 土 度 地 0) そ たが、 の革命 \mathcal{O} ままそ 間 区分に分けられて、 題を見る。 で持ちこした。 の上 そ としての の最も根柢をなす農業 へ近代国家とし 歷史的 日 本 は 封 応は、 な性格 7建時代、 名主が管理 その 封 0) より 日 と土 建よ 中 に 本 して、 大地 が 地 l) 極 0) 近 8 問 代 主 お 7 た か 題 生 強 領 主に ぐら 産 る 大 生 経 名が 毎 産 済に 大きい の 二 牟 経 牢 あ 階 済 う

の支配 ぞれ 行わ 家、 る。 日ま 題の近代にふさわ 名たちとが、 壊する武 ちっとも変り 貢を現物で納[®] え 主義 ば、 生産 で、 地 0) れ い。 主 土 た。 者たちが、 を 地に 土 増 そ 大部 国家となるためには、 家族が、 階 強 0 明治政府の本質というものは封建的な地主と軽工業に基礎を置いた非常に薄弱 名主はなくな 身に 居つ 級 封 なかっ 分は めた。 利害を一 0) ため 建 0) **,** , 同時 的 か U 下 すべての労力を狭 やはり昔ながらの た。 ね į, 級者と幕府より目 0) て来た農民 のままに来て つまり米、 に封建地主でもあったという事実、 処理 にして、 て登場し 大きな桎梏となってい 年貢 って村 が出 の率が、 一来なか 麦、 辛うじて、 て来たのであった。 近代資本家貴族に転身しようとし は、 長となり、 **,** , て、 どういう関係で日本の新 く小さい土地に注ぎ込む過小 小作百姓で、 その他直接生産物で納めた。 った 地 の届きかね 益 主と農民と六分四分とい 繊維 のは、 々 藩はなくなって県郡とな る 日本の進歩を阻む のである。 軽工業にたよるしか る遠い薩長で経済力を膨 耕作の方法 とりも直さず日本の それとともに、 利害の打算より来 大体、 ŧ し 困難と紛糾 V う点も。 ,農業であるということも、 た動きであった。 明治 年 経済機構 明治 なかった。 工業は 貣 つ 新し を現 維新 た。 にな おく 物 に結 1 脹させて来 そ の 土 け って廃藩置 Ċ 資 0) 種 地 で ħ ħ 本主 とな 間 ぼ ども 1 も 払うという 天然資源に る。 7 0) 題 れ が、 は、 1 義 土 た て、 原が 資 経 地 た 7 か そ 本 大 蕳 崩 今 لح れ

れ

で

あ

っ

図を持 な資 て行こうとするため 本家とによって組 った。 西 郷隆 盛 に、 0) 立てられ 政 治 大名と武 的 破 7 局 1 たも 士 0) か 原因とな Ō ら成る支配者たちは であって、 っ た征韓論 この薄弱な基礎 は そ 誕 0) 生第 を護 つ 日 0) は か って ら きり 侵 権 略 力 を 的 強 た な 現 意 化

あっ 百万 勝る 招待 時 新 わ 代 維 円以 とも劣らな 0 V 新 数 て来た。 権 Ę 百年 威 を そし そ 小大名より僅 賦与するため ζ, れ 明 **て** 一 5 大資本家となっ 治支配者 の基礎薄弱 致した利害に立って、 に、 0) かな扶持 利害を共にするために天皇 何 な資本と地主 た。 か を幕府 0) 形 所 有 で 土 から支給されて生活 主権者を必要とした。 新し 地百三十 の支配者たちが、 V 日 本 五. の — の支配権 万町 家も 歩、 外交関: して 大地 を握 そ 有 来 \mathcal{O} 価 た京 係に 主 るようにな 主とな 証 券 権 者と 痥 都 お り、 金 1 0) 天 一億 っ 皇 大 た 三千六 財 家 0) 閥 封 つ を 建 の

た。 は 針 0) 極 確立 憲法 8 T 発布 九 を求 特 年 徴 的な ・の翌年、 める 明 5明治維育 治 に当っ 二十二年) 大井幸子という婦人が自由党に加盟しようとした時、 て、 新 のこういう性格は、 保守的 憲法 が な性質を帯びることは当然であっ 発布されると同時に弾圧を被って、 初期 の動 乱時代を過ぎるに た。 っれ 自 自 それ 曲 由 党は 民 て、 は 権 警察に 支配 解 の 散 思 想

よって禁止された。 「集会政社法」 というものが出来て、 婦人が政治演説を傍聴すること

を禁じた。

それ 社会的 扱わ めに 人民 に 人民 性質の異っ に対して抱いた観念は、 ることに注意が の社会に の大権と共に 明 ここで私共は、 は、 確に 7の権 n つくった傾きがつよいから、 によって作成され、 7 地位を、 利に して 幸福に生きるために必要な諸権利と義務については、 明治というものの本質から結果された。 な たもの い。 νÌ 人民 対する規定は全面的で詳細を極めている。 . る。 男女平等の人民として規定しているような条項は、 集注されている。 であるかということである。 ましてや、この特異な日本憲法において、 の権利をも規定したものであり、 けれども明治二十二年に出来て最近まで伝えられた日 つの驚きを以て顧みる。 何処までも彼等の利害を主眼とした富国強兵を主題としていた。 決定されたものではなかった。 人民 人民 の諸権利についての具体的条項は、 の諸問題よりも大権を絶対 日本の憲法というものは、 憲法というものは、 先に触れたように、 民主主義の発達し 支配権力が自身 男女にかかわらず人民が、 全人口の半ばを占める女子の 人民として自主 のも 何処 明治 た国 つもないの のとして明記 何と外 0) 0) 漠然とし 権 国 の支配者が社会 本の欽定 で 力 あ で \hat{O} 的に れば 国 であ 擁 の憲法と 憲法 ある てし 積 そ 支配 して 護 Ō 0) 極 が た には あ 的 玉

ず

封

建

的

0)

まま

踏

襲

と土 一地と Ō を婦 あ 関 人 どの 係が、 関係、 昔ながらの地主と小 男子に従属するものとしての女子の関係は、 作 の形のまま伝えられ たと同 殆ど近代化され じように、

年) この 女学校令というものが 深刻 な 日 本 婦 人 の運 命に重大な関係をもった明治の特徴は、 発 布された、 その内容に、 まざまざと反映され 八九九 7 年 11 明

教育 その めて、 理想 も強 医、 萎縮させら 明 男が 男子 た 治 沢 0 が 基 め 教 抱 Ш の開 準が 煙た \mathcal{O} に外 育 か の手足まとい 女教師が出ている今日でも、 制 ħ れ 人 化 形上、 た。 いほどでも亦困る、 度も 期 決定されたのであった。 の社会人として美しくたのもしく育ち上らなければならな て **(**) 0) 限定 た。 先進部分の人 文部省は、 女子大学、 になりすぎる程物 した。 けれども、 それらの保守的 女子の社会的 々 専門学校等が と。 女学校令の中では、 には女も男と等しく智慧を明るく、 これ その基準で、 その人々の専門家としての力量、 の道理が が 存 な人々 出来、 今日まで女子教育方針 在意味を男の 判らなくても困 何 は考えた。 1 人 わ その悠々 かか ゅ でる家事 ため の婦 人弁護 家 としてつよ 0) 庭を 科目を中心とした、 るが、 内]助者と 0) 円満 士と、 弁説 根柢をな 余 1 とい 社会人としての i) U に治 7 も ょ 展望 は T 爽 i) 8 う つきり 0) か して る 範 は 颯 多数の に、 た 惨 井 爽 る。 め た に 80 肉 女 止 る 体

智力能 力は遺憾ながら、 大体同 じ専門教育を受けた男子と等しくないという悲 い結果を

齎し

7

1

る

0)

で

あ

だの、 ける 第二 の活 れる 四年間に、 州 した。 了後の大正 安警察法第五 が に 昭 次世 九〇 嵵 動家 地方自治体の 婦 対する 和 五 貯 ま 九〇 参政 年 〇 年 たちは、 界大戦敗北による、 金 日 日本の婦人の解放運動は、 年代に、 0) 本の 全国 勧 婦 条を撤廃させようとして、 三年 権 誘だの、 運 明 Ĺ 侵略戦争が始まった。 独自 町 精神総 動或は憲法撤廃に対する婦人の活動は全く終熄させられ 政治に干与するための公民権さえも持たなかった。 治三十三年)には治安警察法第五条が制定されて女子の政治運動を禁止 新婦· 村長会議は、 明治三十六年) の力で、 全く軍 動員を初めあらゆる戦時 人協会など同じ目的 ポツダ この悪法を打破ることは遂に出来なか 事協力者として動員されてしまったのであ 婦 堺利彦等によって平民新聞が発刊されたとき、 人の ム宣言によって治安維持法を初め 辛じて母子保護法を通過させただけであった。 それからというものは、 公民権案に反対を表明してい 堺ため子が議会に請願書を出 のためにさまざまに努力したけれども、 総動員に狩り出されて、 誰も. 知る る。 つ 沢 した。 つい先頃一九三〇 た。 Ш いった。 戦債 た。 <u>꾟</u> 通 0) 悪法が り、 日 第一次大戦終 婦 九三一年満 本 の買 最 Ċ 人 日 (込遊 本に は、 撤廃 この 参 近 今回 政 $\dot{+}$ 苵 治 権 お 婦 F

か。

で 11 さて、 あ 日 本 つ たが、 0 封 明治 建 初 0) Ō 土 期 過程に民法と刑法とは、 0) 0) 上 明 に根 る V) を下 U し か て、 U 未 熟 世界各国とは全く違っ の男女平等の社会観念は、 どんな工合に、 婦人というものを扱 た畸 形な実を実らし始 このようにし つ て重 ただろう め た 暗 0)

総て に 至 も最 権 0) と婦人も民法上一 対する婦 七—一九 袔 無 民 民法に もそ 今日 能 法 のことを親 る は 親 第 力ということに関する条 の消 おけ 婦 一二年 人 権 八百十三条の の に 八九六年 人 差 お 0) 極 る 社 莂 婦 訶 V 0) 会的 的な 明 人前の能力者になる。 権 7 な害 人 、の立場・ 母 治 利によ (明治 規定、 0) 離 悪 不便を来して 兀 権 婚 0) + E 多 三十九 利 年 って支配され というも 或は結び つい 0) 1 制 項、 面を照返して 兀 限され 7 年 十 あは , , 婚 五 の不平等な規定、 第八百一条から第八百四条に 年 る幾多の条項 届 兀 と思うと、 てい 月、 0 ていること、 規定の中に は 0) いる。 る。 間 つきりと文部省の教育 日清戦争後 に、 法律 が 現在のような結婚難の時代でなければ、 日露戦 例えば第 ある。 ある婦・ Ë 第九百 第 一の成年 八百八十六条から第 一年に制定された。 争後二 婦 人に +七十条そ 四条 人は、 (二十歳) 至る 不利 年 か 方針を照り合せ、 から着手され ら第 未 な 0) 財 成 他 内 産 縁関 に に対 年 相 +-九条に な 時 続 八 刑 代に 百八 す 法 係 或 は ĺ Ź 0) は 規定 至 遺 十七 妻 や 産 九〇 勿 0) る 条 無 妻 か

引

つぱった。

質は、 果は 敢か 支配 責任 明治 は、 たち なる てい 女性 婦 それらの若 民法読 人 今日 る総 0) に関 以 な 0) も にとって不幸なめぐり合せが起るとそのことごとに結婚の条項にお た 全く自然なことであると思う。 生 下 結 V ち 来 0) 法に 局に · に 置 は、 の保 本 涯 女 は自分の息子である してさえ、 ての不合理と片手おちとに苦しまなければならない。 の い婦 0) とい ぉ :守的な日本の支配権力は、 おける女子の 忽ち 努力と実力如 か 生 れ 7 人達は、 民法 う本も著し、 |の姿として今日考えられてい て今日なお女子を三界に家なき者として規定してい る立場になって 妻は夫とちが 上能 あらましその前 何にか 不平等な地位を改善したいという激しい 力を喪失 か 或は 民法における婦人の地位 か 1, つ 何年 る。 た扱 わらず社会的に能力なき者と見なして 養子である この委員会の仕事を、 徳川 か前穂積重遠博士が民法改正 いに立たされている。 人妻 後の年齢で結婚して家庭に入る。 あ 時代女は三界に家な る。 か、 「無能・ けれども、 **,** , ずれにせよ、 力 の改善のため に陥 現在行 夫に死 夫婦 蝸牛の這うようなテンポで つ てし しとい ・要求が その時 の愛に う ま う。 る。 に別 委員会を組 わ の努力を試 わ れ 1 て民 現 **,** , それ 婦 7 れ れ か 妻となった若 そし わ る V た。 た時、 か 人 法が ぞ る民 は れ わ 0) みたが、 れ そ 7 で 相 る 規定 法 れ 続 貞 0) 戸 者の 主と 婦 0) は 操 何 実 0) 0) か 11

文書そ せる を動 子供 は、 全般 に改 には 出 生 0) 0) を考え 第二次 発 子 見 中 が の戦 れ 方に で、 嫡 に 員 で L 考して は Ō つ 民 る 出 7 あるという人間 時 民 他に、 1 V 法 親 お 特にこの 大 子 彼等 中 法 Ě る 的 戦 得 7 1 0) 思惑 私生子も 深く頷くところが な に 社 0) 7 の犠牲は、 0) は、 会 蕳 か 種 の命を犠牲 お 士 区 ける 族 を憚 条項だけがその つ 0) 0) 別 に民法における私 たかと 精 不 嫡 0) -合理 女子 平民 ため らし 区 神 つ 出子と庶 その 的 別 て嫡出子と私生 だ、 に対 1 と書くことを廃止 は 抵抗 として要求 1 の不平等 う問 ・時こそ、 自由さを欠い な する洞方 ある。 彼等 7 と感じた。 子、 忙 題 という根 の問 生子 を、 0) 私 U 少年 した時 生 **,** \ 男に優る女の力として、 察力とい 日 子 子 時 裏 題 本 0) が、 それ 嵵 か 拠 Ò 7 0) 0 期 区 いる。 別が に に、 家 に ら説明 から私生子の差別を削 代から受けて来 区別をかたくし 区別は 故に、 どうして女子の した。 族 うものを、 取 権力は 制 Ě 撤廃され 非常 してい 一げら けれ 度 この 死なすとい 相続者として ども、 Ŕ に 財 る。 理 厳 たの た。 権 産 た暗 ては 由 力 重 0) なぜ沢 であろう 忘 犠 戦争 で、 も 0 相 国を背負 う単 不便至 れ 牲 命 黙 続 同 除 が を眼 る 0 じ 0 生 0) まま に 多 由 苦 \mathcal{O} 進 ま Ш L な 極 矛盾 って起つ女子とし か か 来 た 痛 子 行 れ 目 か とな をも に 供 た 0) 軍 た に U たこ で 事 生 そ を 7 子 私 を持 11 っ 奪 日 あ 命 0) 総 供 た た 目 7 をす た。 本 \mathcal{O} つ 的 苦 わ は 親 ち 7 つ た 戦 れ 0) 0) 痛 0) 天 子 0) Ć 若 常 民 時 た か 又 る 下 関 中 公 め z 5 私 点 者 識 法 0) 係

問題 家庭 民法 家と しなければならない であろう。 激励され、 に帰れと命じ くも における女子の無能力を改正してしまったらば、 7 経 の能 ので 済問 この 題、 ないことを十分知 力を試すものであるかということは、 事実を私共は単 鼓舞され、 てい 食糧事情等が、 のである。 るその口実 全面的に動員された。 -なる一 って どんなに大問題となって、 の最も薄弱な口実のよりどころさえも失わ いた。 つの辛辣な観察としてではなく、 戦争が 終っ けれども、 おぼろげながらも知っ た後、 今日臆面もなく失業させた女子 権力者たちの真に 職業戦線 動員した権力者は戦争が にお 真 こる 7 面 目 れ 1 に 7 人民 き複 深く しまった そ 0) 理解 無限 れ 政 雑 故、 な

のは、 り、 て書か 士族、 諭吉と署名したくらい気概 女大学」が 八九 明 彼の二十代まだ明治以前のことであった。人間らしくない女性に対する態度に憤然 'n 治 平民という身分制が残っていることを不満として、 たも 九年 開 化 のであることは前に触れた。 封建社会において婦人を家庭奴隷とするために、 期における最も活動的 明治三十二年) ある学者であった。この福沢諭吉が 福沢諭吉が な啓蒙家の一人であった。 福沢諭吉は 『新女大学』という本を著わした。 「学問のすゝめ」 常に自分の著者に東京平民 女奴隷 益 彼は明治になって 軒の のための 「女大学」を読 を見て 貝原益! も モラル も ゎ 華 か とし 軒の λ 福 る だ 沢 通

る

漸く 二年つま 、受容れ 彼は、 i) É 本に 気風 長年に亙って極 が出 女学校令というものが 来たと認めて、 めて詳細 始めて 出来 な 「女大学」 た年になって、 「新女大学」を発表 反駁論を準備 社 会 般が た。 した。 婦 そし 人問 T 題 明 治

U

婦人 来る てい 諭 沢 と力説してい 知らずに ことで 会的成員として見てそのために婦 九年 うものを身に付けなけれ 吉 諭 新女大学」 もやは 近代 吉 る 0) 論 は あろう。 に 0) 社会の は、 憐 , , 制定された民法 じ V) T ħ て、 . る。 0) 社会の 民法 1 に 経済 婦 中 も そ る 範囲 さ、 崽 Ō この賢明な助力者である福沢諭吉が、 に 人は 関係 経済に い, 結果とし おける婦 では、 今日もな 法律に はが 0 の女子に関する差別条項を恐らく福沢諭 中で、 関 ばならな あま す ゆ 7 人 Ź くも思っ の 関する知識を持たなけれ の悲劇ば お注目されるべきことは、 いりに婦 常 地 理 人は法律上 解 に 位 いということを熱心に に騙され が を持たなければ、 たか どんなもの 人が か りを生 損 らであろう。 一の知 深窓に育ち世事にうとく、 失を蒙る可哀そうな立場 識、 涯 であるか 0 上に 経済 家庭 ば 婦人の職業的経済的自立 著者が、 経済 説 負わなければならな 不 上 ということを婦 幸であるということを強 0) の安全と幸福 1 上 7 能 吉は深 0) 1 九、 る 知 婦 識ということも 科学: ことで 人を男子と等 次第 に 1 あ 的 さえも保 感慨を以 ることを見 に 人 あ な 八自身が 複雑 物 いことを福 の問題に 0) 化 見方 てな 7 明 見た 全く 福 調 治 1 کے 沢 社

資本 先鞭 に能 触れ る。 後の 的 な経 と理 権 平等に分配するという程の富を蓄積 も伝えるもの 主 Ø) ば をつ をの 保護 大正 I) 長男 主 済 7 力 解とを持って、 Ŀ 義 *(*) 0) 上 一げて 年間に、 国 けたものであった。 分配権をとりあげたのは、 とい 弱 に 0) ないことは注目される。 あ 保 0) 1 進步 とては借金以外に極く僅 うことを言ってい みるならば、 婦 る。 護、 人が、 婦人の経済的独立という問題が 的な面は、 分配 同じ 財 子供 産 社会的に悲境に陥 を与えるべ 相 第 でも、 続或は 最少に 日 日本 本 る のである 女子は きであ 分配 0 「新女大学」は、 し得な 全く、 し 権力は、 の総人口の九割迄 か か実現して来なか の場合に、 る。 りが る、 0) 権利を持っていないことになっ V 財 資本主義 人民 産 福沢 ちなことを諭吉は憐 と主張して 方資本主義化 L 社会の各方面 か持たず、 :諭吉が女子の経済的自立をとり の経済生活である。 Ξ 戸主が 国 日 口 の人々は、 本としての、 1 ツ ったのである。 る。 パ 婦人の社会的地域 況^ま 諸 の諸悪を社会に発生させつつ、 から叫ばれ 日 国 てそれを何 んで、 本 の 生を働き通 の家族 ように、 従 ブ ルジョ って、 今日この点を改め 7 女子に対 制 たのは当然であ 1 る。 人 度で 女子 に十分の ア 民 第 か して、 あ は 0) する経済 そ に 次大 主化 げず、 子 0) も 供 適 同 た 相 戦 8 情 か あ 続

大正 年代には婦人参政権運動の一群の進歩的な婦人たちと並んで、 労農党の一翼として、

建性 そ 婦 7 を遂 力 は 0) れ 人 げ لح 根 広 に 同 す \mathcal{O} 本 伴 盟 る ると共 11 闘 根 とい か 活 つ 5 7 本 動 11 · う進 条件 婦 0) 0) を うち 大 展 人 失業、 婦 歩 0) 開 を確 É 社 的 L 人 今日ま 会的 7 保 に な 経 1 婦 より多く しようと努力した。 地位 済 な 人 で 的 か 0) 団体が、 来 を向 つ 独立 た。 た の女子の失業等の 0) 上させるとい 0) あ であっ 明 可 った。 治 能を与えよと熱心 開 た。 化 しか この 期 う大事 しこの 以 大波 来、 寸 体は、 努力 業に に 日 攫 本 に 提唱 成 も第 わ 婦 0) 功 民 れ 人 て、 0) U 主 し 次大戦 得 て、 政 主 義 治 な まだ 1 女 上 0) 性 ま 伝 人民 後 0) ま 統 が 権 0) 絶えざる 経 社 利 と 0) そ も 済 会 0) 的 平 0) 0) 破 指 とし 綻 発 等 封 導 を 展

場 倣 最 わ 権 小 に ŧ n 拡 説 女 人 明 名誉あるものと結論 張 7 0) 治 て 物とな を 書 書 生 V 開 \mathcal{O} る 立. 活を見て 化 11 1 場 っ た。 女主人 た 期 定立 7 小 以 説 V 坪 後 公は、 って婦 る。 で 内 1 0) あ 逍 た 婦 十八 IJ, 遙が か 人 日 が 0) 人 間 7 当 文学 本 九歳だっ 非常 当 時 1 0) 題 る 富 を述べて 流 世 に 的 書 よく 国 行 作 のである。 强 たこの才媛は、 生気質」 の夜会や、 品を見ると、 、分る。 兵 **,** , 0) 伴侶とし る。 を発表 明治二· 後年花圃の良人三宅雪嶺とその婿で ア 花 その Ż 甫 ij て、 既に 十年代に 0) U 頃 小 カ人や洋装をし た頃で、 その 説 の婦 反動 中 内 最 期 \equiv 人作家というも それ 宅花 助 も愛ら に 入っ 者と に 甫 しく た日 た 刺 が T 紳 戟 され 聰 本と 0) 士 藪 のがど 女 明 令 0) 嬢な 鶯 性 な婦 それ あ 7 \mathcal{O} る中 どが لح のよう 生 の、 活 を 剪 恵 女 登 摸 う を

『文学界』

の同人達の間に移入されていた、

ヨーロッパ風のロ

マンチシズムの雰囲気に刺

正 剛 等が日本の文化における反動的な一 つの元老として存在したことと考え併せると、 極

め 顚 味 が

T

あ

るも 地は 婦人作家とし に生活 「たけくらべ」 樋 あは 叙情 \Box した一葉が描 的に、 稚 葉 0 い恋心と下町の情緒、 て彼女くらい完成 小説は、 繊 は詩情に溢 細に美しく描かれ いく ている婦 今なお多くの人々に愛せられているし、 れた作品である。 人の世界というものはどういうものであっ した技術を持っていた人はなかった。 吉原界隈の日常生活中の風情、 7 いて、 独自な味い 主人公達、 少年少女としての朧ろな情感 の作品である。 明治文学を眺め渡し その現実と夢とを綯な L そこに か たろう。 U 白清 貫 戦 有名 た時 Ū 争 T 前 い合 O境 1 な 後

に止 る士族という特権的な身分を自負する女性も酌婦に転落しなければならない社会で とを心の秘か か にごりえ」の女主人公であるお力は酌婦である。 I) もその 遂に 中で自分の運命を積極的に展開する能力をもたなくて、 人の な誇りとしている女である。 刃に命を落す物語が書かれ が、 ている。 男とのいきさつの痴情的な結末は、 けれども、 一葉が、 若い 生れは士族である。 時代の 僅に勝気なお力である 藤村、 そ 0) あ そのこ 1 他 わ ゆ

わせた風情である。

女自身 学」という観念は 戟されたことは、 建と新社会との うけてい ついてどんな つの の持ってい 珠玉 う性質 る 扱 に鋭 が い, 敷 生 0 る古風 も れ 居 又女同士 彼女の傑作 く感じ、 た。 Ŏ それらの人生課題をじかに の上にたゆたって、 であっ 作品 な封 疑 0) 訚 た。 V でな 建 「たけくらべ」を生む、 風 悩 文学 1, な潔癖さとも非常によく調 6 日記をよむと、 の仲間、 で 定め難 1 、るかが たちにさえある貧富 1 とり上げさせず、 · 薄明 よくわか りの故にこそ一つの美しさを保っ 葉が生活と苦闘 つよい精神的モメントにな る。 和させ、 L 作品 か の懸隔とそ とし して、 「たけくらべ」と 当時 7 女が 出 Ō 0) 彼 た 心 った。 社会から も 女 理 0) 0) などに は 文 彼 封

的能 四十 婦 ことは 基 人 平 塚 礎 力 0) 富 Ø) 解 0) 上 可 発 放を観念 鳥を主唱者とした に 能 「露ということを目標とした。 年 社会的な勤労に従事したこともなかったそれらの婦人達が集まって、 発生するものであ であった。 結 成された。 0) 面 から取扱っ 青鞜社 「青鞜社」 \neg 青鞜』 るかを知らなか の人々の多くは、文化がどのような関 た思想が文芸運動として輸入された は文化運動としての女性の天才 の運動は、 けれども、 **^**つた。 日本にイブセンとかエ 根深 経済的に自立す 1 婦 人の文化運動 る丈 係で経済的 0) __. 九〇 発 レン・ ぞし 揮、 0 能 八 年 ケ 7 限 力を持たず、 文化文学 な 永 1 l) 頃 社会上 とか、 続 な 明 い 知

情は、 度と、 分に伸ば 彼女達の現実はやはり紡績 に ついての情熱を吐露 民法と刑法 彼 女た し得 たちの なか 現実 つ の中に棲息し たのであった。 の能 し合ったとしても社会生活における根のなさ、 工場 力を制約した。 の女工 7 1 た限 のハ り、 、 ナ 子、 観念の上で、 彼女達の飛び立とうとした翼は トメ子が縛られていると全く同 どんなに純粋に天才を 経済的親が 歴 逆の・ 叫 か うりの事 家族 中 で 制

間精: 伴ってどんなに堕落し、 吹を吹込んだ。 に堕落したという悲劇は、 ルストイ、 いうことを見れば、 つの この時 い例を見ることが出来る。 神 者小路実篤が、 新 0 代に 尊重を主張した。 ر ر 口 魅するところある新鮮な力であった。 ダン、 百白 白樺運動の、 樺 社会的観察力の欠けた人道主義やその感激というものが、 今回の戦争中、 口 マン の人道主義運動も起った。 **,** , 彼が要するに華族の息子で、 つともしらず全く非人間らしいものになるかということの、 百白 当時まだ若かった武者小路実篤その他 ローラン、 樺 日本の人道主義者であった武者小路実篤が、 どれ程無智な一人よがりの気持で戦争に協力したかと によって紹介されたヨーロッパの芸術家達 ホイットマンなどは何れも日本の文化に新 『白樺』は人間の尊重、 けれども、 社会の現実の機構、 そののち何 の人 々 年 は 芸術の尊重、 そこにしっか 今日そのよう ゕ 日 本に を生き古し 歴史変化に 例 えば とって 人 恐 息 1

な

\ <u>`</u>

沁

々

とそれを思わずにい

られ

な

\ <u>`</u>

悪 作 りと結び を 品 犯 の題 Ó のように、 , , 7 私たち婦 νÌ る人 間 人は わ 0) しも知らな 働き、 悪 よりも悪 それ \ _ の客観的な意義を全然知らないで、 まま 1 無智というものを生活から追放 に、 文化的にも拭うことの出 曾て: しな 来 な け 彼 11 が れ 人 ばなら 間 書 的 1 罪 た

戦争の犠牲

から喧 突入 この 合諸 洋戦 且 1 ま つ 軍 争が 、 した。 戦 か 事 玉 聖 嘩 5 的 争 か ら戦 戦 始まってから、 + な 両成敗という言葉がある。 0) そして、 日本の 結 几 争犯 と言 年 果を悲しい心で受取った。 前 であっ 権 罪 1 聞 力が 国として、 九 かされた。 た。 満 四五 我 々 州を侵略 日 年 対等の国際的自立性を奪われ 本 八 九 ところが敗戦してポツダム宣言を受諾し (月十五 四一 0 人民は、 Ų 国際間の戦争にしても必ず相手はあるものを、 年 そして、 日 十二月、 中 無条件降伏を以てこの 国を侵略し、 その 戦争を大東 真珠湾の不意打攻撃 或る人々はきっ 大規模の侵略戦争を開 た。 亜戦争という名で呼ば を思)惨劇; 私達 を以 祖 を終った。 つたに違 国 て太平 た時、 を愛す 1 始 る者は な 特 洋 日 L され た なぜ日 本 に 戦 は 太 0) 争 連 平 は

私達 族意 分理 本に 守ることに 0) 民 た ば 識 7 ほ 主 解 側 ば ゆ 自 政 か か 治を なけ くために、 分た I) 反 ら、 お 動 É たちが、 再 者に れば 戦 1 勝 て、 争 びまき上げられ つ 巧に 犯罪 た ならな 聰明 この 勢 自信をもって生き、 利用 V 国 疑問 , , でなけ でそのような道徳責任までを負わされ の責任が負わされるのであろうか。 され、 と思う。 0) ればならな 感情を究明 てしまうことにもなり 結果としては、 さもなければ、 明 ν<u>,</u> Ŝ (,) 日 玉 私たち 際間 本 建設 誤 か に つ の手 のため ね た狭 お ける な がや \ \ \ それは日 V 民 に、 日 る のでは 私 つ 族意 本 たちは と端 の戦 新 本が 識 U 緒 争 に あ 1 責任 捉 敗 わ に 民 る が つ わ 主 ま け れ た 祖 1 の 日 1 から、 たば 意 本 か 玉 [を愛 そ 味 を形 を十 と。 か 0) 勝 l) 民

義間 の結 E | 遡って考えると、 なぜ 0) 0 口 果とし 日 血 利 ッ رُرُ 本は を流 害 そ 諸 0) Э | 0) 第二次ヨ 矛盾が、 国 及び 玉 際連 二十八年 口 あ ッパ ħ アメリカは 盟や軍 程多く 第 の人々 口 前 次大戦を起 ツ 備 įς 0) $\widehat{}$ は発見してい 縮 人 深刻極まる戦争の 大 九一 小会議 戦 々 0) E 几 お 命を失い、 したことは などは いて侵略戦争の責任者と判断され た。 九一 平 八 和 国民 誰の眼にも明瞭 惨禍を経験 国際連盟が出来たと同時に、 建設 の第一 |生活を互に破滅させ合い の上に極 次ヨ してい である。 めて薄弱 る。 口 ツ パ Eてい] 大戦 な力 同 時 口 既 なが ッパ U るだろうか。 に か お に第二次 持 資 あ ら、 本 れ 得 主 そ 程

画

ばと 世 本 る ヨ | 11 次戦争を防ごうとし 形、 Ò . 界 7 侵略 戦 漁夫 経 口 あらゆ ツ 験 争 ゙゙゙゙゙゙゙゚゚ 0) 的 され 0 利 0) 危 支配者はヨ 多くの た破 を求めて、 る会議 険 は、 壊を心 進 総 て あら 歩 7 的 Ō 第 1 か 口 ら嘆 た。 ゆ ツ な人 人に警戒 ۱۹ 次 る 大戦 0) そ 力 々は **É**, そ 0) 0) 戦 ざれ 時 均 時代からちっとも本質の 0) に、 矛盾、 争 真 衡を発見する方法をつくして、 が 面 7 ド 非 , , 目に第二次大戦を防ごうとして 人道的 イツ たのであった。 Ξ] のナチスとイタリー 口 ッパ な所業であることを心 内 部 進 Э | のその苦悩 歩 口 7 ツ 危機 パ 7) 0) の第 な に フ から 乗 ア 11 に迫 V 侵略 じ ッシス た つ 恥 次 7 戦 大 来る 争 戦 折 トと日 あら 7 を あ 11 5 第 ゆ る お

同盟 な独 尽し 尾 機会に乗 に 日 を結 附 裁 7 本 が 力 V によ んだ三 満 る、 剻 日本 つ 平 そ に侵略を開始 7 玉 0) 和 は は、 玉 忙 に 苠 しさの 更に手を伸ば 対する世界 西に に犠 性を払 東に 隙 したのは、 に 兇暴な力を揮い 0) 乗じた仕)努力を、 わ して真珠湾、 せ、 日] V 事 暴 わ で 口 **行的** ッパ ゆ あった。 南洋 始めた。 る電撃的侵略を開始 に が -諸島、 破壊させる 戦争を避けようとしてあらゆ ナチス そしてヨ 東 が 亜 諸 切^きっ ヒットラー] 玉 掛け [に侵略: 口 を合図 ツ パ イタリ を始 が 0) 戦 \overline{U} 性 格 8 禍 合うた 異常 もそ る努力を 陥 め 者 つ 0) た 驥 的 0)

人が

重い

病気に罹

った時、

それを癒すために協力するのが

人間らしい仕業であろう。

或

ょ

生命を奪われてい

るのである。

根柢 すの は、 とである。 わ つの るために戦争参加を危うが への ことに成 こそしたが 世界を混 いと参加して、 ħ 無智、 が、 同 その病気を一層重くさせ一層余病を併発させ、 から理 るべき立場に 盟 乱に導 功したりした。 人道 玉 世 解 それというのは、 が、 痛手というような痛切な経験は一 界情 して の行為であろうか。 南洋 玉 11 にある。 勢への いなかった。 たという意味で決して正義の行動ではなか 際間に取 の旧ドイツ領 人民(無判断 日本が戦争侵略責任国として国際的処罰を受ける った政治家、 った所業は、 第一次ヨーロ の生命に責任を感じない彼等は近代戦争の惨劇と 三十年四十年と後れ のまま、 これに対する答えは子供でも知ってい の委任統治地を稼いだし、 この大戦争に突入した。 真剣な平和建設の努力を横紙破りの 銀行家、 ッパ つもしていない。 大戦に その他は二・二六事件という暗殺 た平面的な戦争技術と戦 命を危くさせようとあらゆる手段を尽 ぉ いて、 青島 った。 折を見て、 日 世界的な理解 に日本名で町名をつける 本の財閥 道徳的 る。 連合 と軍 責任 のは 術 暴 日 複と を持 と生 避け を十 力で いうも 国 本 側 さ 事件に 分に 破壊 産 は 難 に 0) つ ちよ 他二 7 能 Ō 儲 いこ を け 間 力

ちの心もちは、どうしてもそれをうけ入れかねる。 この頃よく、 日本は強盗戦争をした、 とい 自分たちは、 われる。 それをきいたとき、 つも強盗戦争なんかし 私た

なく、 の戦 えば、 べき戦な を尋 な なその人達及び、 にさえも 相談を受けただろう。 たち七千万人の いう時、 か か った、 争 ね 天皇が 争犯罪 が これ程大きな犠牲と、 た 招か その か。 私達 しな 始まったことを知った。 という反対 宣 人々は、 れ 者であるのだろうか。この点は十分考えてみなければならな V 真珠湾の攻撃が、 人民は当時 É 戦 7 のがよいとも、 私達 γÌ 本の 詔勅を出 な どこに、 人民 言葉 人民は の心持がする。ここが、 の政府から民族の信仰的よりどころとい の正 全く侵略的な日本の支配者が 一般は、 して始め これ程大きな社会生活の破壊を齎し 「いくさ」をした者であったのだろうか。 どんな人民の大会が持たれたか。 十二月八日の朝突然発表されて、 U アメリカが憎むべきか、 全く不意打であった。 V させられた戦争に、 意味で自分達でした戦争で死 た戦争である。 非常に重大なところだと思う。 数百万の人が今度の戦争で命を失った。 独断で、 理非をも云わせず引き出されたの 憎むべきでない 人民としては、 人民に一 どの新聞 わ んだのではなくて、 人々は驚 た戦争を、 れ る天皇から、 私共総 か、 戦争をする 言 V が、 てア 全然そ いざ始めると 世 なぜ 本当に、 7 度 Ż 間 どん かとい 0) IJ 0) 0) 0) 愧はず 不幸 判 が 力 輿 相 な 私 談 ょ 断

この事実を明瞭にしなければ、 私達の今後の生活は、 どんな新出発の足場をも見出すこ

のが、 とが出[・] 日の ならないのである。 11 る。 生活を築くためにはしっかりと現実的に自分達人民が置かれ 特 来ないであろう。 に婦 0) 戦 争によって全く粉砕されている。 人に取って、 なぜなら、 その生涯を託すべき処と明治以来教え込まれてい 戦争の結果私共の日常生活はこのようにも破壊され この恐しい荒廃の中 た立場を把握 から、 私 共 る家庭 が しなけ 新 そ ħ Ō 1 ば 明 も

とり 人の て来 若い女の人が、 い た不意打 国 どの で見られない程重要である。 肩に た国 わけ、 語られ、 「日本の婦人」というものが急にはっきりと「戦う日本の婦人」という角度から見ら 国でも、 から、 極 8 農業の 日本のように繊維軽工業を国家の生産の基本、 型に嵌められようになった。 て重 呑気に楽しそうに樹蔭で読書などをしているような絵を表紙につけていた 太平洋戦争が始まって以来、 戦時は男子の労働力に代って、 状態が全く封建的な過小農業であって、 く懸っているところでは、 同時に又苛酷な条件を持つようになる。 例えば婦人雑誌などで、これまでは洋装 戦争によって女子の社会労働 先ず日本国中ではこれまで漠然と考えられ 婦人の社会的勤労が極度に必要とされる。 農家の労働方法は、 経済的発展 の基調として発達 国際信義を裏切 の負 担 家 は、 庭 をした 内 外の 0) 婦 つ

つの

眼

を見

開

1

て、

立.

つ

7

いる表紙が

見られ

るように

なっ

た。

的 婦 も に Ō 人 が、 動 0) 絵 < か は 昭 和 も 和 萌 服姿 十七年 瞭 で の絵姿となった。 な 頃になると い; 中途半端 「日本女性らしさ」ということが誇大に強調され な和 そして、 服 0) 日 遊んでいてもいけな 本女性の絵姿は、 少し上ずったような黒 11 さりとてどう社 洋装

現実 制が、 の年には 焦 尺 慮 既 珠 父、 男子 ĺ そして、 は 成 湾 あら + 極 日 0 弟達 端に み の就 七 本 の不 婦 四百五十万人という勤労動員がされたのであった。 Á 车 ゆ 0) 人 業禁止 意打 に対 近代 る機会と場面 4 からは、 昂まった。 毎 な徴用されるということになっ 目 体 攻撃は皮 する婦 は 国家とし 毎 頁 0) 職 国民 戦う日本 凄まじ 昭 域 人たちの苦し その 相的 範 に好 動 和 囲 員 +が 計 乪 弱 に **,** , 戦 の女性」 拡が 年 勢 体 勝 的 画 [と範 を現わ 利 () な調 ま った。 で のように見えたが、 **,** \ であらゆる家庭の は労務 1囲を拡 愛惜の情を押えつけることに熱中 子 0) し始め で、 精 た。 神 企業整備によっ がめた。 勤 の方向 日 た。 昭 員計 本 和 女性の勇敢さや忍耐強さなどを強 で決定 干 徴用がどしどし 戦争遂行者 画 と呼ばれ 九年 屋根 戦闘 からは学 て自分の店や 0 昭和十四年に比べ Ų れてい が 下から引き離されて行く夫、 たち 日 軍 事 徒 行わ 日 自的 0) た労働 軍需 لخ 動 員が 進む に添 勤 れ 8 るようにな 力 生 始 こにつれ れば に 産 めた。 行 先を失った わ 対 せようと わ 四倍以 す 対する Ź 調 統

航空機 が それ 様、 常に多かった。随って若い婦人の職業への進出ということは、 れ 政 上 々 へ、 に充ち満ちた。 の中に含まれ した人も直ぐ女子挺身隊として、 出 一府は 一の増 学校 方この 征 によって経済的な打撃を被った家庭は非常な数にのぼった。 万二千五 「技術を高めよ!」という声は、 又は 女子整備員 の製造はその七十%までを女の手でやれるし、 女子機械工 加率であった。 へ行かずいきなり工場 或は徴用工になり、 時 満州や中国 期に たから、 百七十三という数に達した。 生産場面に女子が吸収されて行くばかりでなく、 急速な企業整備が行われて、 の活動は決して男子に劣らないものとして大い 補導所を作り、 女学校の生徒も専門学校の生徒も、 その中で学徒の動員は百九十二万七千三百七十五、 さまざまの名目で、 収入は減って、 \wedge 各職場に送られた。 行って働かせられるという状態になっ 女子が男子の七十%の能力を持 働く女性は誇りである」 十五歳から四十歳までの婦 それによって生計が不安になった家庭 平和産業の部分は全く閉塞させられ , , わ ゆる進出する女性 発動機は五十%までを女子の手でや 「女性よ、 中学や男子専門学校の それぞれの人の生活的たた 遽かに拡が という声と共に日本全 に参加を求めた。 生産 又経済的な柱とな っていることを強 人は の数が夥しく 工場へ!」 た。 女子挺身隊は つ 玉 女学校を卒 た 南 民 生 動 職場 調 徒 る男子 たから、 なった。 方 員 でも非 \hat{O} لخ 計 島 業 玉 同 兀 画

受取 得た。 望し 状況 集 係 か ことにさえな 可 め 1 及ぼ うて、 生 も 7 は で その 決 活 0) 1 も から で あ る して楽観 寮 た あ か つ た。 起る め れ 0) つ ら、 に、 あら て、 ば、)道徳的 けれ 実際は全くインチキな すべ Ŵ 徴 徴 軍 ども、 きものでは る 用 人 用工と女子挺 な 不 工 0) 備 思惑が 頹 \mathcal{O} 動 た。 廃 な 採 員法 は 条 用 時 件 に よくなって、 な が しろ、 身隊とを、 か によって動 経 職 つ 場そ 施設と内容とし た。 つうちに 挺 0) 身隊 戦 資金 も どっさり自分 争遂行者たちは 員され 動員された人 0) 0 に 採 0) お 用 融 た学徒、 け が持 に 通 る労働 U ろ、 資材 たな 0) 夢中 女子 々 工 0) の配 場 0) 工 1 勤労 場 で軍 精 条 に 工 神 件 給 働 場 \mathcal{O} 需 挺 に 実 上 か で 0) 身隊 見遁 不 力 少 せ も、 生 備 以 か 7 産 らず など せ 1 そ 上 0) な だら \mathcal{O} れ 拡 0) 便 が V 張 け 員 悪 利 軍 を 影 た を う 関 労 を

員され 費す えば 親 るために、 で 兀 労力 あ 来 子供 た る $\dot{\exists}$ 本で ŧ 0) は を で 世 0) か 持 は、 が あ 界最 ね 外 る てから託児所や保育所 つ 7 から、 に 大 家 働 0 庭 11 生活 る も 1 勤 7 働 0) 労女 で 11 1 の方法が なけ 7 あ 催 いる る。 n 0 女性 その ばならな 最 全く社会化され 大 の設備を持ってい 0 条 0) 苦し 件が 生活は、 (1 とい みは、 改善され · う事 てい 輪に 子供 情で 輪をか ない な た工場は実に少い。 をほ \ \ \ ある。 まま ったら 家事 けて負 に、 そう 0 運営 か 担 婦 が Ĺ · う婦 多く た は 0) ま 軍 た 急に女子労務 な め 人を ま 需 に つ 生 働 婦 産 日 か 中 せ 例 動 が 母

響を

して

行っ

た

0)

で

あ

つ

もね 者が激増 るば か 政 しても、 I) 府 で はちっとも工場主を監督し激励するところがなか あ その条件にふさわ つ た。 しい便所、 食堂、 更衣室その他の設備を整えることに つ た。 彼等の 利 潤 追 水に お

さも 時間 に働 様であった。 その時に 早くや夜遅くは行われ ければならない苦し 食糧 でく主! か、 ないところでは、 は いろいろな配給がある。 さもなければせき立った心持で恐ろしく混み合う電車に乗ってい 婦にとっては、 規 格 統制 に従っ (V 働い ない。 事情に立たされた。 て配給されるようになった。 , , つも ている女の人達の食糧問題は、 1 つも昼前後、 いつも気掛りな問題であったし、 親切な隣組を持っている人達はよほど仕合せであった。 私たちがよく知っているとおり配給は決 又は夕方、 しかし、 働いている人達が家を明 V つも不利な立場にお その配給にしろ、 隣組 の人達に気兼をし るような げ 昼間 か れ 時 7 いる る有 T 職 場 朝 な

爆弾、 では済まなかったし、 ということを旗印として努力させられたから、 労働 弾丸、 時間についてみても、 ガス製作の職場でも、 婦人の肉体にとって極めて有害ないろいろの化学薬品などを取扱う 婦人労務者は、 婦人の労働は長い時間強要された。 ひどい無理を押しとおした。 決して八時間七時間というような労働 何しろ戦 局 切迫 時 間

にな に 怪 つ 物 つ れ た。 的 て、 な そ 軍 目 事 れ 0) 費 に 前 と も拘 の賃 らず、 軍需 銀 は 非常 成金とは、 女 子 に高 0) 方は くな 当然通 っ ずっ て、 過 の膨脹 と最高が + 七 八 の を招 大体 少年 いく でも た。 男子の三分の二という差 数百 インフレ 円 0) 収 入 がが \exists あ が るよう 進 が む

切り 働 わ あ か、 奉 n これら 仕 た。 0) れるとか 婦 ため、 人 会が 出 0) そ 間 の 征 例 地 差率 えば ちぎれちぎれ 軍 区 人 別に そ 当 米 0) は変化させられ 見送 時 0) 0) 強制 配給 工 り、 婦 場 になっ 人たち \wedge 所 と内容 手 0) 出 伝 仕 迎え、 て、 な 0) į, 事 の愚劣さとで私共には忘れられ に を手伝うために、 か 家らし 出るとか、 傷 つ 日 た。 は、 病兵慰問、 ر ر 恐ろし 休 安 陸軍 官製婦 あ 1 孔な 崽 ば 病院 か 1 0) は消 明 l) 人 \wedge 各 洗 1 寸 た米袋 方 11 体 し去られ 物、 が な 面 か 組 *(*) ·防空演 ら 縫 を 織 継 た。 求 物 す など ぐた め る る 細 習 め 労 0) が 々 盛 働 た に 集 め 力 ん に行 0) に る た 細 動 労

わされ 背 で足 動 員 中 食 Ċ 糧 V) な たのであった。 家 補 間 庭労 題 って行くとい 11 部 が 働 分を、 円 滑 0) に 進まな 女が 負 う仕 こうも落ちつく暇のな 担、 近在 買 事 () の農家 が 出 ために、 始 ま った。 防空演習、 行って、 もうこの 人の V 毎日 諸だ そ 頃から買 女性 0) 1の間 のそ 他 0 ^ に、 生活を取 Ō 出 0) 動 他 L ということが始まっ 隣組からの強制 員などと二重 0) 野菜を買込 って みれ ば んで、 軍需 貯金とか、 重 0) た。 働 生 自 きが 産 分達 配 厖 負 0) 0)

なら 家計 大な 先ず男が 数字 な を援 か た上 つ 戦 け た。 線 7 る に 働 け 奪 国 1 .债 わ 7 れども、 れ 1 の消化とか た。 る女子 その その立上った手や足や指の一本一本に、 の勤労者 奪 いう仕事 わ れ た男の のやりくりに、 ŧ あとを埋める者として婦 つまるところは 解決を俟 一家の主婦、 つ 有様 そのように大きい とな 人が立上らな つ さもなけ た。 家 け ħ 庭 れ か 担 ば 5

が

か

けら

ħ

7

1

たのであっ

た。

業病 なく、 抗 千数 た割 で私 日 \mathcal{O} ん 力が 本 な 死亡率 婦 に私 達が 百 0 0) 出 人 力 平 軍需関係の化学的部門で人間の体に有益なものは殆ど一つもない。 弱くて、 正 0) 悲し 直 П 方によって、 均 共 などは な リー 男子 般 人 民 調 みと憤りとを以て思うことは、 0) 生 無理な勤労、 健 査 0) で済むという風に規定された。 人当、 殖 眼から隠そうと、 康状態は の結果は、ベンゾール及びその誘導物に対 機能を破壊されるということを明瞭 実際の必要が三千五百カ 平均女子一 非常に悪くなった。 奉 仕労働などの結果昂まって来たのである。 人当の基本的 努力して来たかとい 戦争遂行者たる支配者たちがこの事実を、 そして配給はそれを基準に 人口に対する結核の罹 . リ ー な ジカロ から五千カ にしている。 リ | う事実である。 して、 は、 口 御 . リ ー 婦 用学者達が ベンゾー 人 病 食糧 率、 0) で 肉 あ それはそうであ け 体は 流産、 T る 0) ħ ルば 間 ども、 7 権 力 極 も 題 拘らず、 に 乳幼児 か め にしろ、 I) 7 媚 Ć 抵 職

息子が の方針 れる。 間 方向 働かされるということについては、 ためには、 厖大な数百万 な方向を取って 生省はそのことについ 11 どん に それ 向 へと、 それは人を生かす力ではなく、 この な愚か 特 に これ一つを見ても、 って発表すべき正確 故猶 攻隊となって殺されて行くこと。 賛 道 成 人民 女子勤労動 輿論を起さなか 徳的 な 0 出 1 とし 来 V) 母でも真 人 なか 間 たか 般 に低下した環境や、 いことと思ったろう。 0) 0) て、 員、 動員 生活 ったのは外ならぬ ということが 面 った。 学徒動員が激しく行わ 計 な統 決して公平な見解を発表しなかった。 日本 目に子を愛すれば、 に対してどんなに無責任であり、 画 が、 計を、 · の 政 驚くべきことは、 当然な不安と不賛成とを感じた。 明瞭 人間 府は自分達の利益を守ろうとして戦争を強行し 若い 殺す道具として作られているのだもの。 あらゆる部面 日 らしい条件によって保たれて行くことが である。 可愛 女性のためには苦痛 それを親たちは、 本 Ò (V 母 子を護るため ・娘達が れ 親たちであった。 統計一つさえもなくて、どうしてこれ 始め 統計局でさえも、 で持っていないということを告白 動員され た時に、 どんなにいじら どんなに破壊的で、 の智慧は 0) 公平など 多 て工場で働く。 母親 番 ·設備 今日当時の雑誌を繰 不安を感じて、 昭 不思議な 和 施設を急い 達は自分の の場 +葄 形 年 け そ 出 で で 自暴自 以 発揮 長 れ 可 止 来よう。 て行く 降 で 時 は 愛 政 は 作 80 間 ょ 府 7 程 棄 世 難

果も の役 り拡 娘や息子は、 を抑え、 の消化に心を砕 ただろう。 返し繰返 むことを躊躇 を抑えるような気持を持 の苦労もしてい ないような眼 げてみると、 人達がさまざまの想 人達は口 歎息を笑顔にかえて生きぬいていたのであった。 L 働 述べてい [を揃 積極 1 してはならない、 į, て来る子供に、 、たし、 えて、 訶 何と到るところで の先の働きにも追使われていた。 . る。 に あらゆる戦時 たのであった。こうして見れば若 その消極的だと言われ 日本 防空演習も無理にやっていた。 いをしながら生きていた間に、 っていることについて、 0 せめて体の足しになる食物を食べさせようと、 ということを、 母親は自覚しなければならない、 動員に応じようとするのに、 「母親の再教育」ということが言われているだろう。 もつ る母親が、 陸軍や海軍の軍 出来るだけどっさり買わせら と違ったもっと英雄主義的 年とった家の女性たちもやは 婦人会の動員に応じて、 1 婦 現実にはどういう生活をして 人 家庭 人、 子供を軍需生 生産 教育家、 の母親が 面 へ直 接吸 自分で買 な 産 職業 1 大し れ 言 へぶ つもそれ 「葉で! 収され る債 紹 り涙 ち込 T 介 出 繰 券 効 所

結婚 婦 会社 人の したばかりの人達でさえ、 から 結婚難が、 É 学校からも総て引抜 めきめき増大して来た。 自分達の初々しい家庭生活を保つことは出来なかった。千 か れて戦場へ送られつつある。 若い彼女達にふさわしい青年達は、 婚約 をしたり、 工場 或は から

過ぎな いうも 言論 苦痛 がふえようとも、 ほど偽善的 表現されるということはな 、針を持 だと疑問 つの 0) それ V 自 0) と同 が 由 縫 って、 ほ は に は、 とは、 目にどんな想 生 とん じであっ 抑えられ れ 電 決 それ 総て どなかっ して決 車 7 1 0 た。 らの の 家 てい 中 る ゃ して、 1 のだろうか。 た。 かっ 内容は全く、 た。 庭、 を籠 駅 昭 和 の前や勤務先などで縫って貰っている若 電 た。 出版 言葉 総て めて 二十年八月まで、 車 。 中 の上 に対する検閲は猛烈に 日本 の婦人、 いたことだろう。 そうではな -でも、 情報 一にも、 の人民はそれ 男子の心に等しく目覚め 局 行動 編 風呂屋でも、 輯 V, 日 本の で 0) あるという点では、 ほ 人間としてのさまざま 種 上 中には安心 ど無智であ に Þ やか ŧ 様 買 々 ま 物 戦 まして文字 しく 時 0) 行 U つ 取 て、 たの 列 7 締 7 V 女性 V 0) 口をきけ \mathcal{O} ただ 中 何 規 だろうか 0) た で 則 上 0) Ō 達 万 種 を設 で 重 あ る **∰** 類 い 場 そ 正 1 出 け る 経 の そ つも 所 本 版 直 け れ 物 れ

られ 違っ 流 た。 7 0) 言 場 蜚 V 谷に そうしてうっか 語 0) 当嵌 社会に対する正当 取 締 めら 1) ń は恐ろしく綿密であっ り買物のための行列に立っていると、 た言い方である。 の批評、 希望もそれは けれども、 た。 流言蜚語は、 当 時 取 い締られ 0) É 陸軍 る 本 事実にないことを流 の流 流 Ò トラッ 言蜚 言蜚 語は 語 クがさっと走 0) そ 中 \mathcal{O} 布する に 内 れ が

誰

か

姿の

な

1

看視

人が

人民

の集るところには

紛れ

込んでい

た。

いる偽 辛抱 説と 院に い程、 日本 もの 態の下に置か 送とか、 女性は自分の命までも犠牲に捧げたのであった。空襲によって、 るならば、 科学を教えるところではなくなった。 せるため っては必要でないとされて、 って来て、 は、 連れ の人民の生活とを比較するような機会は、 いう演説 すればこの戦争は必ず勝つこと、 日も 為替関係とかの名目によって、 にだけ動員されたのであった。 殆ど人の集まるあらゆる処に張り繞らされた。 て行くという人攫 早く勝って、 そうやって立っている時間があるなら洗濯でもしろと言って、 最悪 れた私どもが、どうして自分達がおかれた事情の法外さ、 早く戦争が終ることを希望した。 それ の社会条件を、 は総て人民 早く終って欲しいと思う。 いめいたことも現実に行われた。 中学校、 の苦痛を抑えて、 客観的に理解して行くことが出来たろう。 英語その他の外国語は優秀民族とし すべての責任は人民にある、 女学校の科目から取除かれ 学校は、 出版物 若し戦争が勝たなければ終らないとい 戦争の必要としないことであっ の国際的な交換は禁止された。 この戦争の 公平な歴史や、 勝つ迄は、 雑誌 憲兵の耳 という雑誌、 「聖戦」 と言われて、 職場の傷害によって命を た。 世界における日本 ということを告げ 外国 であること、 と捕 自分達 ての 婦人達を陸軍 の市 本という本、 縛する手 正 辛らけ こういう状 たか 直 の騙 白本 民 な 0) 日本 ざれ 5 ħ 生活と 0 国 人 地位、 知ら わ ば に 民 辛 演 う 病 0 れ 輸 取 が

7

1

新

兵器

とし

ての女子」と。

落 か 0) め つ 見 な に た した学徒や勤労婦 特 時、 7 いことよ V 別 な 職 な か 危 場 i) つ 険 Oŧ 災 たかということにあ 防 最 止 害は非常 大 0) 人 施設 0) 0) 数 原 従決 に増 因は というものは考えられ 大する して少くな 日 る。 本 のが 0) 政 \neg 主 府 当然である。 \ \ \ が 婦之友』 人民 不 なか 熟練でし の の或る号を見る 命をどんな つ た。 しか か Ë その し青 熱 暇が に消 少 心 年 に長 とは 耗 な 工 品 か 時 蕳 つきりと書 つ 女子 0) た。 機 つとし 労働 械 0) 前 か 者 7 U 0) に れ 暇 た 立

習慣 だけ な情 界が 人間 は実に有 れ は 第 の母 的 熱に 驚 二次 自 日 ... 分 な 本 11 効に とし 犠牲 戦 0) 駆 7 世 0) 感情 母 日 界戦 時 り立てて、 に堪 利 中 T に 本 涙がな を披瀝り 争 用されたのであった。 0) 女 0 当 戦法 で世 性 えて 然 0) 愛情 を眺 界は 0 7 7 1 することを憚 自 0) る わ から では 由 日 ゆ めた 数 が 本 る 々 日 な 0 必殺 0) 0) の声を抑える結果になって、 本 は 惨禍 か 母 -にはな 特 ったり、 つ 0) 0 を経験 た。 戦 心 攻隊に対 私達は日本の社会のそれほどに根深 持 闘をさせた惨虐さは世界を驚 か そ というものが、 った。 0) した。 道理を公然と主張することを遠慮 涙を社会の前 してであった。 け 日 ĥ 本 ども、 0 婦 世 それ に流 界を驚かし 人が 僅 その惨禍 は戦争を遂行 封 して、 か 建的 十 六七 か その た。 した。 0) な習慣 中 い封建性と、 0) 理 けれども、 少 か そうい 年 ら、 をもって 非を愬え を英 た ため りする な う非 雄 お そ る そ 的 世 の増

加

に

ついて書かれたことがあった。

国民学校の上級

生から中学、

専門学校に至

るまで、

不規律な工場の労働と、

青少年の

学徒は動員されて工場に働いていたのであるけれども、

利さえ れに慣らされ も 放擲 た、 し て来たことについて、 自分達女性が、 愛を守る智慧さえもなく、 涙をこぼすというよりもも 女の命と言われる愛情 つ と無念さを感じ る 0) 0) で 権

ある。

恥な され 支配 矛盾 く嘘 と眼 は、 若き空の 婦 どわ の間 に入 人民 たのであった。 者によって、 人 の感情は、 から、 か るグラフまで、 の破 間 勇士に対する憧憬、 つた 同 現実 士 滅 深刻な社会問題が生れて来た。 の方向 の殺戮 「皇軍 彼女たちの愛してやまぬ男たちを殺す刀に付ける虚偽 0) 現実が苦しければ苦しい程、 ·敗北と架空な戦勝との不思議な絡い合せのまま時が経 キリストは神 へと、 に熱中した言葉を与えた。 0 勝利」 戦争を讚美しないものが 特攻隊 総て動員されて行ったのであった。 を描き出さないものがあったろうか。 の名にお の讚美 , , の方向へと追 て戦争を合理化 大河内一 現実から離れて、 そのとおりに、 あったろうか。 男教授が帝大新聞 いよせられ し熱心なキリスト 今日 小説 前線にいる兵士達、 日 た。 本 から、 Ö, になれば、 女性 の飾 に青少年 つうちに、 和 雄 りとし のやさしさは、 歌 教徒 々 U それは全 か Ò ら、 T 1 0) 女が、 その 女心 利用 或は 犯 罪 ري.

それ て、 会的 始ま カー の生 堕落 の職 の し 正 た T 関 め 健 社会矛盾 つ をすること、 活を崩して行った。 能 で又金を儲けること、 に染まって行 い娯楽設 た青 全にゆ 小 教 に 縮小 Ū 育も授けられず、 新 夢 この 年 備 聞そ して、 たか 0) 秶 0 0) 生活 盗んだ資材で、 な 1 重 0) っ にすることは た。 波 大 他 映 い社会の実情とは、 な社 破産 0) 0 画さえも軍事 蔭 その結 未成. 面 に圧 会問 だ対 に 窃盗や詐欺が 学校もなくなってしまった青少年達は 現 年 題は、 出来 わ して鋭くな 者 し隠されてしまったこの現象は、 果工場の資材を持出 れ 例えばラジオを組立てたり、 の喫煙、 映 なくなった。 な 揉消 か 画 大変に殖え始めた。 U つ 急に金を持つようになった青少年達 た。 されて闇に葬られてしまっ り始め 飲酒 か な そ 1 た。 買婬は驚く程のスピ の ように 解決策も対策も輿論 頃、 して売ること、 ところが、 な 日 一本の総 つ た。 世間 時計を 私達 金を持 忽ちそういう真 の注目は ての娯楽機関 そういうも 非常 た。 に によって形づ 寸修繕 な勢い って、 何を告げて ド で ちらり このように 無 の 緊張 生 0) 垢 で は したり を現 社 活 0) 戦 面 な くら いるだ 少 会的 目 ブ す 時 わ な 年 Ź П 目 れ 社 達 な 程 的 決]

繰返 どんなに安い労働力、 しくりかえ し触 れてい 即ち婦人と青少年の労働に多く利潤を追って存在し るように、 この事実は日本の 生産、 経済 の機構が 薄 て来ている 弱

条件が は、 練 者、 った。 展 か さな作業所をどっさり拵えて、 れさせられ 11 日 大河内は日本の農村における婦人達の世間知らず、 くようにという計 くと被害を被るから、 で 本 Ū と 最近 が、 既に そ 中 あっても、 7 いう証 急に Ū に 存 来 きで 彼が こ 婦 ばら + 在 た 7 数 生 拠 0) 牟 撒 日 産を膨脹させると共に、 と並 1 計 7 で 人達であった。 た。 ある。 すぐその機械 本 前から着手され 1 画 11 る。 た。 画 の農村は. L 行 理化学 た であった。 各地· て、 明治: 「農村 戦争が始まって、 そこでは昔ながらの徒弟制 知られ 方に分散させようという表面 研究所長大河内正 日 社会の発達が、 この青少年と女性の勤労を戦時的に 本 0) 0 この 非常に簡単な分業を組織 工業化」 7 の後 操作を覚えて働 7 V) いる通 た。 れたエ 計 労働 画について、 それ の方式というものは、 大河内正 りに 一業は、 0) 繊維工業によって、 敏 5 基本としたのはやは いて、 *(*) 0 一般には貧困 一敏は、 度や、 計 半ば 小工場は 私達 忍耐力、 画 軍需生産 は、 手工業的 婦 今日 Ų 年 の目的の 期 軍需産業を都会に集 み 人が当時 農村 んな や、 従順を利用して、 戦争犯罪者と であったし、 世界に に、 婦人の最 0) 5軍需 全国 外に、 の婦 利 半 り賃銀 も非常 用 封 屋 する 建的 丙労 的な能率 類 生 人達がどんな 産 大 田 0 0) に驚 文化 の犠 舎 な U 計 安 0) な青 働 0) ٧Ì て監禁され į, 下 的 画 方法 真面目に を上げて行 村 の程 青 請 少 に 牲 1 中させ 少 年 小 0 0) 工 に未 度も であっ うも 年 場と 中 上 0) 工 に 7 労 労 場 に · 働 な 熟 小 置 後 7 0) 働 働 を 発

0)

搾

取

0)

方法

は、

おそらく、

今

 \exists

の世界に

類

0

な

V

も

Ō

で

あ

つ

たろうと思う。

ぞれ も か ることも知ら 使う方としては不便に 人員を一 Ō せることは つまで経っ に 0) 止 めて 村 0) 0 な て 置くことが最 経済 工 有利であ ŧ 場 1 状態を混乱させな Oそれら 内 要求、 な ると、 に つ 集 の勤 て 来 める 上 することも理 一の方策 その著 労婦 る。 と、 農村 集 書 であると言わ いために」 人達 4 の中に 解 ほ 0 0) 力 村 L 都会に な へを恃んで近代的な労働 たの 明言していることである。 々 その に、 \ \ \ れ おけ たの その 切離 村で女が Ļ る工場 であっ して少しずつ女を 内職を そ た。 の労働 0) 労働 こういう婦 者 U て得 の自 婦 に 対 人 同 る賃 働 覚 時 す 0) Ź ょ か が に 賃 う 銀 出 大 人 É 銀 勢 0) に 7 7 労 均 4 置けば、 来 は 0) 労働 . 結 働 そ 力 れ 11 す

が って れた 婦 ア っていた。 Ż 人 動 ア 買され IJ 0) メ IJ カとソヴ 労働と カで ても、 しかし、 しろ、 た。 も、 戦 エ 特にイタリー、 うもの 彼 争 ド トとイギリスと中 日本婦 女達の 0 イツでも、 本体 は全く が 犠牲も究極に 人の労働力は第 平 悲 和 劇 イタリ ドイツに 的 0) に、 防 崽] 衛 連合国 お お 0 人民 でも第二次 ためで 1 , , く生活の ては目 ては 側 そういう人間らし あっ 平 0) 一本と同 破綻 Ó 和 婦 世 0 たから、 人 建設とい . 界 0) のために追立 労働 大戦に 様 に侵略戦争を始 力は、 現実にさまざま うは い目的を持 お V てら ては つきり 同 様 れ 12 大 って 強 た 8 幅 た立 に婦 た 0) 度 0) V 間 に で 目 な あ 場 題 動 人 か 員 を は つ か 0) 持 持 7 力 6 つ

工業化 たし、 との上に のような方法をあらゆる部面 玉 重く 丙 . の ゕ゙ 封建的な、 か つ て来たのであっ そして又資本主義的な二重の搾取の方法は、 た。 にはびこらして、 社会的に発言権 この の少 大河 ĺ١ 婦 内 人と青少 この農村 年 0

烈な 需食 失っ かも う状 もな シャボン 部分を、 農村 骨が 各生 か た農村 態で暮し 糧 ものであった。 毎日 0) 0 0 産部 余剰 どん 労働 そ 軋 供 女子青年が先に立って、 むばか 0 出 の婦人の仕事が一層困難になって来たと同じ時に、 の婦 は、 なに が 他 を残すためには、 門における能率低下の て来た。 2男子出 0 人 八達が、 女が 洗剤 又馬 りの辛苦を凌いで働きつづけて来たのであった。 農村では全く自分の家の梅 食糧 成し遂げて行くかということを競争させられたし、 の欠乏、 糧その他 征に伴って、 割当だけの 0 計 繊維が悪くなって洗えもしないスフの製品が 肥料 画的 の供 婦 生産、 出は、 人の 全く婦人の肩にか のない、 供出量を生産して軍需を充たし、 原因と反比例する増産の必要に追立てられ 馬耕競技会、 計画 都会に生活している婦 馬のいなくなった、 的配給は日本では手後 の実さえも自分勝手に 草刈競技会、 かったということは、 農村の婦人達が田 男の 人が察し 婦 その他農業労働 れに 梅干 なくなった なお自分のところへ 人達が燃 に出 農村 計 も 置され 説明 殖えたことな う 料 た。 来な か に 行る 圃 な お 0 田 欠乏、 け で働く 男手を 畑 1 0) とい 程猛 必 の上 る 重 軍

農民 農 男達 物に 木綿 0) 富 る 7 逆 来 来 た。 行村で 方に た。 関 出 0) , , の で 者と は、 着 も あろうし、 だろうか。 状 0) るということが報ぜられ 物が 負債 は 実際 態が は 不 曾 家 0) まだ 自 近 7 正 族 生. 曲 現 は 日 年 規 なくなった。 生 活 何 することが少 わ 本 産 0) 1 0) 0) 首 関 都会 増 上 物と交換でなけ れ 用 つ 0) 農村 た。 係などを引 0) も大き つ 産とその 万と還っ 具はそのように欠乏に欠乏を重ねて来るの 「の勤労 摩 0) 擦、 は 病 つ V 手拭 1 的 ·社会問 て来 昨 婦 な社 1 先達てまで 戸 配給とを攪乱するような農業会、 人に比 _ 当 くる 7 は 今 であろう。 Ó 7 れば 1, ij 会現象として、 足りなくなって来 る。 題 数 め 供 V 野菜 べて、 にな て、 な 百 出 それ 日本 \ \ \ 闩 0) っ 決 難 け の借金を持 農村 て来て 'n か 夥 つ売らな の農民は で農村婦 ども、 て農村 U Ũ 物が V 1 0) 婦 νÌ た。 問 戦死者が 農村 平均 婦 た。 題など、 1 人は 人の つ な 習慣が 7 肥料 1 人の生活を、 v, 食物 生活 のに からどっさり ところが最近数 ?ある。 戸 るということが 当り !金は 農具 それ 出来 は豊富 に、 は、 統 制 は農 も足 戦 てい 本質 ある 増 会 これ 災 万 産 であろうし、 とい りな を被 円近 村 前 る 的 闇 の までよ から、 年 売買 線 に 必 0) う状 幸 統 要は V 封 つ 12 0 11 送ら 建 た 福 現 間 計 が 状 i) 態に 横 態に 的 都 お 金 昂 に に に えそら 言わ ŧ ħ 焚物 な を は 行 な 会 ま か 保 な な 土 つ 7 る 担 も 地 5 7 有 全 れ つ 11 7 る は 豊 0) と 0)

軽

V)

楽

L

V)

明

S

1

ものとはしていない

のである。

実の 値を失ってい った。 その頃ま けれども子供に道理がある場合、 を沈黙させているという状態に立到った時は、 うとして来た。 に追付くことは不可能 和十六年以来昂まっ 被害を受けた。 ても止まらない 昭 対策を立て 被害を被 して総て 和二十年の始まりから、 け は、 れども、 では物価 · る証 Ō 子供 り、 この 得ない 基 つの 本的 多く ば 力で上昇した。 拠である。 この頃を境として生活費 の昂 母 て来ているインフレ 頃から軍需生産が急に能率を低めてきたと共に物価 いから、 政権が、 な面 Ò 親の言うことも聴くし、 であるから、 騰と労働賃銀 小都 で人民の生活が破綻し始めるにつれて、 市が焼 例えば母親が落ちついて道理に従って子供を訓 ひたすら威かしつけることで戦争を遂行し表 日本は猛烈な空襲を受けるようになった。 社会に対して現実の政策を失って、 母親がそれを静かに聴くことも出来なくなっていて、 しかし、 が 二つの間 の増大とはほぼ釣り合いを保 れ、 ーショ 労働賃銀というものは の膨脹は 村々 の開きは破局的に大きくなって来 ンは、 親であるという尊敬も持つことが もうそれは、 も軍事施設の余波を被って思い 熱病 表面 患者 上の労働賃銀をぐん 支配的権 の体温計 あらゆる場合に、 って上向きに来た 警察、 政府は 力として のように止めようと が 大都会という大都 憲兵 それ 面 上り 戒することが 0) に対 統 ぐん 始 も 存在する の力で人民 め か する 物 の を保と このよ け 上げて、 であ な 価 真 V 価 高 昭

昭 の統 する する者を殺された。殺されることについて沈黙を守って来た。 家権力というものもそれと同じではないだろうか。 きなり気に入らないことを一言言えばもう殴るという状態になった時、 和 母親と思えるだろうか。 二十年の夏が来たのであった。 のもとに国 心から私共を悲しませ、又憤らせる。 [内生活は恐ろしい破綻を孕み、 子供がそれを軽蔑するのは当然とい その偽りの報道のために 戦局は 大本営報道が総て嘘 刻 刻と敗退の途を辿りながら 嘘で塗り固 わなけれ 人民 子供は で は自 あっ ... 8D ばならな た 分の それ 権 たというこ 万 を尊敬 を表 最 も 愛 玉 面

終って

事的 を行う民主化 ポツダム宣言は受諾された。 九 な 四五 専 制 政 年 治の本体をむき出 の方向に新しい出発 (昭和二十年)八月十五日。 しに自身の前に眺めた。 そして、 <u>の</u> 一 歩を印することとなったのである。 日本 日本は無条件降伏をもって太平洋戦争を終結 の人民は初めて、 人民が人民のために、 これまでの長 人民 1 封 建 0) 政 的 軍

私たち日本の人民は、

自分たちの払った犠牲の全貌について、

やっとその真実の

幾部分かずつを知りはじめた。

太平洋戦 争に お いく て陸軍関係の人的損耗、 四九万六千人

海軍関係人的損耗、六六万二〇七九人

太平洋戦争開始以来一般空襲被害概況

死者 二四一、三〇-汽单勻厚如以另一般空襲初皇相沙

三一四、〇四一名

負傷者

家屋全焼全壊 二、三三三、三八八戸

家屋半焼半壊 一一〇、九二八戸

罹災者 八、○四五、○九四名

空襲被害の比較的大きくない府県は、

動く船として残しもった頓数は、 海外にのこされた在留民・復員兵士の輸送にも事欠くば

僅に九府県にすぎない。

四面海に囲まれた日本が、

かりに僅かである。

実の中で、 内容が現れて来る。 統計で見れば、平面的に見られる家屋の全焼全壊の指数、 具体的 に、 夜具一枚、 即物的に数え直して見るなら、そこには全く生活の全破壊、 布団一枚、 皿小鉢から下駄一足、 半焼半壊の指数を、 傘一本、バケツー 生活の現 箇に至 混 乱 0)

倍に

な

7

も

表

Ū

切

れ

な

11

辛苦を齎らし

7

1

る

0)

で

あ

るま た 5 0) で の損 努 九、 耗がふくま 辛 苦は、 資 れ 材 7 難 1 る。 輸 送難 そ の 荒 すべ 廃 の 7 中に、 最 悪 何とか O事 情 0) て 下 に、 再び 生活を組立 これらの 数字 7 が 7 ゆ 何 私

たし、 た金 終 じめ 後の は 旦は 員することに 金とされたにしろ、 戦 輿 終 論 とが 区別 職場 戦 を、 直 た 時 れ を 金も貰った。 後 激 出 なく、 は、 を失 同 解 時 婦 来るように 雇 大きな っ Š な 辛 に、 手当とし 人 ij は 互に た。 刺 棒 軍需· 男が に 戟 全軍 特に 戦災保険は五 互. 辛 家 軍 会社 な て、 還 0) 棒 需 隊 て与えた。 々 将 つ つ 命を気づ に U 産 0) 当 校階 たと思わ て来 は、 は たという喜び 業 武 装 時 即 に 動員され 陸 級 $\dot{\exists}$ た婦 長 解 が か 千円支払 軍 軍 職 11 除 大臣が 人 ħ つ 間 が トラ 員 人 た。 .. 行 は 待 れ て暮してい たちにとって、 0) た ッ 部 以 解 7 わ 雇を わ 隊 上 れ 1 れ 人民に クを使っ れ の、 か た五 0 7 た。 た。 1 解 した。 散に 謝罪をしたほどであっ 新し た家庭は、 た良人や父兄たち 百五十万人の労務員 軍 7 需 現実 解職手当、 どんな喜びであ まで、 そして、 産業は 伴って沢 1 驚愕 生 活 直 と不 軍 再び 0) 復員手当など、 0 Ш 隅 ちに閉鎖され 家庭 安に、 物資を分け 人当り の資材を背負 々 が \mathcal{O} 落着 姿が は、 5 つ た。 いくら 心づ U たろう。 動 11 殆 11 た。 残 取 1 7 も くようにな ん そ たと ど全 額 か 目 0) V) 11 れ は 出 に を 前 軍 0) 思う。 ぞ 形 部 特 映 纏 線 人 れ i) は 殊 も ま が Ú 銃 復 0) 預 つ つ

凡そ昨 週報』 食の小 まま て人 日 手当をも食込んで つ話 家庭とし て来た。 、々は が 据 日と高くなって、 僧が 置 年の十二月までにたいて 伝わっているドイツ か 生きてい 三一六号参照) ては纏まった金が齎らされたであろう。 れ 二十五倍に物価 「小父ちゃん一 た。 特別 るだろう。 しまった。 昭和 の技能を持たず、 形を示 の大恐慌 万マークお呉れよパンを買うんだから……」と言っ は高 +官庁などの月給は、 赤字は危険信号を鳴り響かせてい して 騰 年を百とすれば、 いの家庭では、 した。 いる。 の七、 これは 収入の途を図れない人々が落ちて行くところは 八カ 最低二十五倍の物価 今までの貯金を使 月以前の状態とほぼひとし マ 今日の下駄一足、 二十年八月十五 けれども、 ークの札束を鞄に入れ これに対して、 . る。 の昂騰が ĺ١ 日は 足袋一 尽し、 この赤字の中でどうし 二千五 あ て歩 足に近 復員 る ĺ١ 日常 わ ĺ١ 百 手当、 け たと 0) \neg 指 で 同 生計費は、 ある。 数を示 金 盟 街 . う — 世界 額 解 の乞 闇 職 0

いう配慮をしただろう。 戦 を動 嵵 員し あん た戦争犯 なに 「愛国 罪 次の実話は決して例外唯一の場合でなか の支配者は、このようにして家庭から引 心」に愬え 「非常時の国民的良心」 に愬え べつた。 離して集 「新兵器としての婦 めた人々にどう

商売

で

あ

ij

賭博

であ

或る大規模の軍需工場で、 八月十五日即日傭員の解雇をした。 平均五、 六百円の金を貰

どん 第一 婬が 満 娘達 眺 若 は 十 従 7 切そうな つて、 Ó ħ じ に た 海 円 たところが、 を隔 娘ら 7 始 少 ま 食 0) な実質 **,** , 蜜 事 I) 7 7 遠 待遇ぶ る街 気分は 柑 行 は + つ 7 11 決 を そ た 地 1 か 0) 食べ 月ま 土 方 0) 働 食 な も 0) つ 女の げ 若 りで きを見 そ 7 散 地 か 当 物 0) Ò て、 蒔 漫荒 ら徴 1 0) れ か で か 11 氾濫、 ば は 彼 た 事 لح あ 俄 人 ら 女達 それ迄 来 出 解 廃 情 何 **,** , 々 つ 用 ならなか か うことは、 た。 され に 力 が T 0) 雇 L たか 変り 復員 その て、 月も 手 0) 1 当は、 る あ 自 L のように寮で暮してよい て来 1弁で、 んと輸 大部分が、 も る者 は つ 人 正 つというのだろう。 か な た。 は 知 U U T 送網 れ 闍 \ <u>`</u> 誰 乗 は V いざその生活が 1 介って帰る な 健 五、 外食券で、 食 た青年達は し \ \ \ も の破 故 1 康な慰安の 六百 知っ 郷 れ 見た眼にも全く素人である若 で減らされて行き、 感壊され ま る船さえもな け での 円の 7 ħ 帰ったろう。 ども、 6帰るに (,) 食べ 金が 始ま 過度 な 男達 る。 てい なけ とい **,** \ 今 日 には 胃囊 家は 街 0) つ る状態から 労働 自 て見ると、 う話合 々 Ш. か ればなら 然に 或る 大都 は、 を歩きま 五. つ な た。 1 か 円 者は、 5 博奕 0) V 市 つ 0) 俄 な をつ 遠 が お まるところ闇 汽 工 道 間 を始 場 わ か で 様 車 1 1 徳的 け 地 V ま に つ に 6 側 は Þ 娘達 やら た た。 た。 方 働 め を食べ 外 な で 利 た。 な 違 か 食 間 は か か 苦 男よ 集 な 券 題 5 そ な て、 痛 女子 た 4 \mathcal{O} が \mathcal{O} 来 0) 1 い 11 職 的 l) 生 食 事 食 起 7 は 物 な 活 従 事 h 情 況ま 11 つ が Щ る で 親

業者数である。

崩れ た姿はどこから来 7 いるのだろうか、 これは決して簡単な道徳問題では な

慌 働者 のも 者 勤 は れ 11 の数は に た婦 8 高 女子 0) なっ 時 の大 0) 7 に で V 挺 /労働 身隊は た軍 世 ある」とい 部分は 千三百二十四万人である。 7 界の 1 か 需会社が 者の たりする。 も、 家 四 失業者はどうであったかということを見較べて見よう。 家庭 庭に 数は驚くべき多数に上っていた。 十七万二千五百七十三人という夥しい数であ つてい 解散 の中 復帰する 失業 る。 し 心的な男子が 7 の形をとらない失業者は日本中に満 私達はこの数字を心に留めて、 のであるから実際の失業者というものは いたり、 政府 は 新ら まだ前線か し Ū か , , ï 職場は復員職員を消化 その 復員軍人は ら帰らな 人達が俄 7 さて昭 か、 旧 つ 職場 た。 ち溢 か に 或は復員 職場 に帰 和 れ 挺 七、 7 兀 U 身 ħ 切 を失 隊 百三十万ぐらい 11 るし、 る。 八年 ĥ 以 っ な 7 外 に 0 推 1 も今まで 女子 世 程 動 定 界恐 失業 員 物 ぱ 労 価 F

十七 れ 兀 た 千 当 ので 万で 五. 時 百 0) あったが、 あった。 世 万 0 . 界 \dot{o} 失業者が 経済恐慌は未曾有 日本 昨今のいわゆる実数というものは四百三十万になっている。 あっ 0 几 た。 十七万という数字は前古未曾有のものであるとして非常 米国 の失業者を地球上に溢れさせたとい は百三十万、 ドイツ六百万、 イギリス ゎ れ 冱 てい 百 方、 る。 十倍の失 総数は に驚 日 本 兀 か

裏

は、

真直

街

頭に

つづいて

いる

のであ

もあ と食物と燃料とが湧き出して来る家庭というような、 いう厚顔な責任回避であろう。 女子労務者の大部分は家庭に復帰するのである」と言い切っているということは、 り得 な V) 魔法 の小屋 でな , , お のずか 「家庭」 5 へ表口から帰された女子失業群が、 殖える人数が楽しく生きて行けるだけ 魔法の 小屋は、 今日、 日本 溢 れ Ò 出 0) 何と 衣 した 料

軍人 言葉 が復員軍 動をする、 な なって集 П 新聞 前 義 線 は 振 がそれらの犯罪を犯すということについて輿論が高くなって、 理 りで から帰 短 に 団的 も人 は 人に対し その ある。 強 盗 「情もあるもんか」と、 け った人から、 な強盗をし、 奥 れども、 $\hat{\sigma}$ 追剥 けれども、 て冷た過ぎる」と、さながら人民に現在の社会悪 奥の原因は果して何 怖 個 最後まで残ったのは 検挙され 静かに思 0 1 記事 人間として深い た記事 が 押入った先で啖呵 いめぐらした時、 日毎に報告されなければならなくなって来た。 処にあるだろうか。 が あった。 兵士であって、 絶望のこころを示してい そのとき、 を切ったことが書 これらの復員軍 この間、 指 不幸 揮官は飛行機で疾うの昔 宮内次官は の責任が 元特 な元特攻隊 人が秩序を紊す行 いてあっ 攻隊 あ 員が る 員が 卌 か 中 間 のよう この 心と 復員 0) 俺 眼

に引揚げてしまっていたという話を、

戦争が終ってからは屡々聞くようになった。

主的 戦 れ った。 してまで、 者仲間である市民の間に向けられて来ている。 正当な人民 こへ、どう建て直すべきだろうか。 たことを見出 によっ うことは、 んな真実の償 って来て、 た感情 局 毎 夜毎 な が 銃後 判 絶 て立身をした。 望に 断 暗誦させて、 力は与えていない。 の 焼け この間までみんな秘密にされて来た。 総理大臣として戦争犯罪者として掻き集めた財産を護ろうとした。 の生活は護られ 権 人間 なるとさまざまの 不幸に強 いがされていることを見出しただろう。 L た家 そ 利 , , の自覚に立戻って自分の破滅を救う方面に順序だてて物を考えさせる自 に対する真実の拠り所が心の内で失わ . る。 の屋根を葺 それが出来ないとビンタを食わ いられた無智から、 「聖戦」 この人達は、 てい とい て、 義理も人情もな いたのは、 口実をこしらえて飛行機で本国に逃げ帰っ わ 人民に絶対服従 家庭から離れ ħ 自分の強い た戦争の本質は終って見れば 憐れ 大局より見れば、 法律の上では、 い扱いを受けた、 な妻子の手であって、 られて来た大きい深 る不安と苦痛とを耐えて 「戦陣訓」 を強 権 してい れた感じ。 いて来たこれ 力に強制だけあって誠 を書 同じ強権 た将校たちは、 押入った人々は加害者であ という深 いた人物は、 その虚. まで 国家 虚偽 に苦しめられ い犠牲に い深 た。 の 無的 の手 1 の侵 抑 た 遠 実 対 では 人 略 VÌ 軍 1 な そ 細 圧 傷 々 の 戦 島 君 心 Ĺ 持をど を離れ 皆 は、 争 勅 な 7 Þ つけら 彼に で、 論を 無で か 戦 で سلح 害 帰 あ 功 婚 つ

り、 支配 をも含めて、 階 侵入され 級 の関 た市 私た 係を実際に立 ち人民がすべて、 民は被害者である。 って観察すれ 強権 けれ ば、 と犯罪的 ども、 兇器を持 人民 な戦争による被害者 の生活と、 って私達の それ 生活を攪 を徹 で あ 乱す 底 的 るそ に傷 0) つ けた Þ

はな 救 れ ということを自覚することは、 7 このことは V くなって来て る 民族を高め 被害者 明 瞭 0 1 る に自覚されなければならないと思う。 0) 部をもこめて、 る。 はただひとつ自分達の結集し もう決して早すぎない。 私達全人民は、 た力の 女も男もこの破 そして最 おそすぎたとしても早すぎること 合理的な運営が も不 局 から自然 幸 な あ 加 分達 る 害 0) 者 み 0 0) 形 で 前 ある 途 で を 現

は、 たり、 政 0) げという、 いて見よう。 解体命令が連合軍司令部から発せられた。 府 私 共全 は 輸 今日までどんな具体策を講 だけ 人民 入 米が 昭 の前 0) 層 実力を以て、 出 和 人 .来ると気休めをい <u>二</u> 十 民生活を破壊する方法 には、 年 + 重大な生活 今日そ 月 0) 初 じ得て来たろう。 の再建をするというのだろうか。 ったりするけれども、 上の問題が 旬 日本 U か 三井、 実現してい の帝国主義侵略戦争の 押 Ü 三菱、 並 強権を発動 んでい ない。 住友、 つまるところは、 る。 人民 U 安田 先ず食糧問 て供出をさせると脅 動 の生活を破 因 7 の四大財閥が 0 < つ つ か 米 題 で に対 0) 壊 0) 実 あ 価 解消 例 た る 格 か 財 政 吊 せ 閥 つ 府 上

処置と思わ

れる。

が、 によ 考え 閥が かけ ほ の偏 成程、 達の生活にとって、この戦時利得税と財産税というものが、 会を通過 ということを説明してくれた。 に解消させられた。 という希望を与えた。 られることになった。 6 構 の — ても、 って惹き起された苦痛 戦争とい 在を調整するために、 これらの 1 解体せられるということは私達の心に、 な 部 した。 V 戦争によって多大な犠牲を払い、 0) · う人 贅沢 軍 需生産者ばかりが、 先達てラジオで読売新聞 四大財閥 類的な犯罪によって得た不当な利得を吐き出させられるということは正 な暮しをしているということは、 ところが、 総ての新聞が、 日本を破壊に導き、 の、 少からぬ道徳的な意味をも含んだ性質のも な食糧問題にも、 中 ここに政府 それによると戦時利得税は、 心的な機構は変化させられたし、 巨万の富を積んで、 この 社 の論説部員が、 の戦時利得税 処置に賛成の声を挙げて、 七千万の人口を限りない苦痛に陥 住宅問題にも、 生活を根本的に壊された人民 何となしこの社会も、 納得の行かないことである。 謂わ 非常にはっきりと分りよく、 財産税についての法案が どういう関係 インフレーシ ば彼を富 戦争によって国 或る 企業 人々 ほし のの筈で 公平に向 大衆 を持 <u>の</u> ヨンの たため の投書を載せた。 内 入 部分 に対 ある。 って れ に生じた富 Ì その 不 社 7 安に 会事 臨時 従完 いる (1 つ 人達 誰が る あ 情 私 財 か 議 全 る

取り が 同 異な ジオ られ に、 解説 見て 1 っているよりは、 ので 財 も直 産 る税 者も 感じを抱か 政 じ 0))経済事 あ 府 れ 税 解 は、 「さず、 ば、 が考えてやってい 明快に説明した。 説に にしろ、 彼等 情でのろのろと這って行くものと、 僅 率は少くても利潤 よると、 , せる。 ずるずるで払わないでも済んでしまうという可能性をもっていると、 が 三ヵ月でさえ経済事情は大変化しているのに、 0) 要らない金と、 戦時 定限度に、 戦 利得 定以上 時 る便法である。 それは数十万円の税金を払う最も多額 利得税徴収 0) 富を平均化して行くということは肯か 規模は、 の高 の大半を引攫うものであろうが、 要らない土地を独占して、 額税 の方法と、 は、 不幸にも、 より少い、 四力 誰が思おう。 年支払延期 集めた金の処分方法は私 政府を買うだけの額に より僅か 社会経済不調 の許 U 四 それ これ か 0 年 可が 儲 蕳 利潤を得た から先 に対 けな れ あ の る。 る。 猶 達し して 和 か 予と たちに極 つ 四 毎 0 7 は 人々 原 た いうことは、 力 H 1 猶 人 年 0) 大 な 0) 暮 予 に 0) め その は 課 た 日 7 め 奇 ラ と な せ 本 を

ていることはそうではなかった。 集 めた税はどう処分されるのだろうか。 必需を充たす方法が考えられているのだろうと思っていた。 その金で、 私達は、 戦時公債償却をするということである。 その金を基礎として、 し か し政 当然 府 が 人民 0) それ 自常

いう意味であ

勤人 経済 らな ば二万円を限度としているらしいが、 の足 左の ると から 察すれば、 も るとして二千円の実価に過ぎない。 のいきさつは最も単純 へと返されて行く。こうして見ると、それが発表された時には、 手に に穿 程持 軍需生産者に、 ある統制 るだろう。 にしろ、 事情を一 握ら そしてこの 1 つ それは悉く、 てい 7 仮に今日の価格で見積れば、 変させた。 せ、 あとは大銀行、 いるだろう。 のように思われた戦時利得税にしろ、 二万円という査定はどのようにされるか、これは た下駄を、 返してやるのだということは。 補償金として支払われるということでもある。 財産税もつまるところは、 な頭 二万、三万の現金を持っている農家は少くな 大衆課税としての性質を持っている。 解説者は、 左にはきかえるというだけのことである。 でも判断される。 大企業家が保有 二千円と換算しなくても、 今日の金で二万円といえば、 大衆の中には一 体一つにさえも一万円近いものは着けて 政府 Ü また形を変えて最も富める ている。 ……軍需生産に対する補償に は、 財産税にしろ、 割位し 右の手から取っ その公債を償還すると か保有され この点はラジオの解説者が 日本の農家はこの数 さも財閥 重大な問題でなけ 細 __ 公債を私共 円が 財産 かく本質に触 いであろう。 た金を、 7 に対 者か 一税に 十倍にな , , な する ら順 つい 同 1 の家庭で、 えば、 T じ 公債 れば 都会 年間 て見れ 入間 歩 つ 正 に大 れ 当な 7 7 であ 観 衆 な そ あ 右 0)

力説したところであった。

行方 戦 行わ 利 狥 編 玉 戻し を、 なぜならば 害と一 で 成 丙 時 物 ざれ は実 今日 あ 生 てやる仕 利 れ 価 ij, 産 得 た。 O狂気 際的 税に 体ではな う事実を、 た全企業を統率 そのような勢い 0) 財 要を握 現に貿易庁というものが設置され 人民大衆は には 閥 組 しろ、 のような昂騰 に 0) なっ V 利 るこの役所に、 何 告白 0) 益を擁護することによって自分の 財 0) 課税 産税 で て で消耗 あ U 1 命 しようとしている。 る。 てい る もな にしろ支払わされる立場になってい に代えた労苦や、 につれて、 0) であ るものだと思う。 いと同じな大財閥 しつつある。 頭として据えられ る。 昭 財閥 和二十年十二月は 解体は この事実は た。 そういう人民大衆が最 は か 賠償 現在 な たの 大企業家に、 7 物資、 の支配者の利害は、 利益をも擁 つ 僥倖によっ の表 日本の は三 力 井である。 見返 面 月に一 政 る。 上 てい 一の見せ 護 府が、 政 り物資 も直 府 し くら 億円 7 が 接 V \equiv 0 か 再 全人民 井 か蓄 る 貫 輸 け に最 び か 0) 人 Ū は 出 に 形を変え も、 貯 間 積 金 7 入を も容 過ぎな 財 0 0 日 そ 引 幸 集 司 赦 出 閥 本 0) た り、 7 福と l) 0) 0) 金 な 貯 しが 払 で 走 再 0) 金

によって、 臨 時 議 会は ようよう勤労者が自分達の権利を自覚し、 民主化する 日 本 0 歩 みを示すように、 労働 それを組織 |組合法案を通過させた。 企業者たちの全国 この 法 的

持ち、 えば 者が を立 うな 商工、 侵害 総てのストライキと勤労者 をもって、 増 な生産サボタージュと闘う行動に移しはじめて来た。 ライキする労働者に対して、 キが起るとすれば、 とる必要な 進 単に 取締 てて の虞 厚 集 より ある よりよく社会のために生産し、 労働条件を改善するというばかりでなく、 , , 方針 生 4 月 労務階級 ないことに注目するであろう。 兀 的 行動を統制 を布 生産を増大させて、 場合にはそれを不法行為として断乎取締る。 日 人 行 動 0) の い 大臣によって、 の自由を獲得 _ 若し大衆的行動が現場に起るとすれば、 て、 0) 四 して 利害判断と共にサボタージュしている企業家を刺戟する 相 生産に従う人々が 声 の行動 明 いる権力が、 彼等は工場閉鎖で脅かす。 であ した勤労大衆を威嚇しようとして 生産 発せられたのである。 の根本には、 る。 の真の民主化を計ろうとするためであ たった一つも資本家のサボタージュを これは労働組合法によって、 不安を解決しようとする勤労者ら 総ての新聞は、 生産を高めようとするために、 企業家の悪質なサボタージ 社会的必要を満たすために 昨今新聞が伝えている 働かないで食えるのは、 新聞を一 この点を衝いた。 今日、 という声 枚でも読 「暴行脅迫又 それは勤労し生 が明が ストラ ユが しい 企業家に む人は、 若し る。 のは 内 1 あ ため 自主 ょ 取 は キ ょ i) ス 締 何 所 \mathcal{O} 企業家た りよ 対し で 能 る方策 産する このよ か 0) トライ 司 有 権 ある。 スト 熱心 とい 率 法 権 利 を そ を 0)

法を執

ij

得るというのだろう。

ち 児ご の 政 で 性質を持ってい あ 府 る。 は このことについ 政府 がが .最も る民主化 断 ては 乎 \wedge のサボタージュをやってい 沈黙を守って 糾弾すべき本 l, 体は、 る。 自身、 このサボタージュ る政 その 企業家 府 が、 サボ のそ どのような決定的 ター れ に あ ユ る。 と 双ふ 生たか

れだけ る。 た勤 疎開 鉄の 家計 れは 距 ということになった。 離 最 非常 そ 成程今まで 低賃金というものが公表された。 0) 簿と最低 関 0 T も最 疎 1 識な 係 達 開 る か 低賃 ら通学 値上、 賃金 人 の交通費は、 う い 、口は、 0) 銀 諸官省 四 公定価値 百 U る学生は、 兀 どのくら 百五 一家 てい 五十円也というものを睨み合せて見ると、 0 この・ 据置 格 から主人と息子が 十円はどんなに脅威を感じるだろう。 る息子のために この全般な 都会 度 V 月給 あ 0) 的吊 玉 る の住居難 のひどさから見れば、 .鉄 か、 二十五歳から五十歳までの男子最低 上げ 0) 値 疎 遠距 年に千円の交通費を予算しなけ から、 開 上によって、 (タバ た学生の数は 離 たい コをも含む) 通 勤、 7 ζÌ 非常な打撃を蒙 通学してい 、は遠距が 応適 何 人 が発表されて 正な 不思議なことが 離 あるだろうか。 を通 処置 ると仮定す る。 勤、 で 四 ħ あ 百 ばな 或る 通学 1 五. ħ る。 起 + らな 家庭 岜 疎 開 今日、 7 か には そ 玉

更に瞳を転じて先程の戦時利得税、 財産税ということをかえり見ると、 これらの支払わ

に難 て来 なければならない税金は、 か 7 1 る。 小倉金之助博士もこの関係の微妙さは、 そう考えると実質は果していくらの引上になるのだろうか。 やはり外見上、 ましになったような四百五十円也の 簡単な数字で現わせな この V) 上に 計算 ĺ か 非 か 常 つ

あろう。

得て 百五 に仕 場に立って主張してい に参加する権利である。 主たちは、 あろうか。 男子が そもそも婦 婦人 事 ていることも変妙であるが、 十円也と示してい に る事実には大いに注目しなければならない。 熟練 に参政権 四百五十円、 労働組: 忽ち親族間に土地を分割しはじめた。そして小地主の土地をとり上げは 人参 は認 政 合法: 永年 権を認めたにしても、 勤務 る。 る。 は、 女子は百五十円、 めても、 婦人が、 土地 政府 同一 している婦 民法、 はその法案を通過させている。 労働に対して同一賃銀ということを、 の有償自作創立案を政府が発表するや否や、 公民権をもっていないということは、 日 本 · の 婦 刑法上の婦人の差別待遇を変える意志は 人の能力 この差別がまたまた尤もと思われない。 極めて形式的で誠意のないことにおどろかされ 人が、 力は、 公民権をもたないで、 公民権は、 現実に三分の一 巿 しかも現実には、 町、 の価値 男女勤労者 多勢の積極的な婦 村等自治体 いきなり参政 し 日本 か な な 女子 共 男と同じ 中 1 の運 Ò 通 と明言 じめた。 も 権 大 最 の立 0) を 地 低 で

ある。 構が 議会 の自 婦人たちが、 の行政機構の たらすことが 主化、 これまで の中でどのようなよい 公民 自分たちの住む市、 権 民主化に着手してゆくことを不可能とすることである。 につい 通り、 出来るだろう。 こまごまとした行政機構に参加 民主化こそ、 7 封建性と官僚気質でかためられているとしたら、 Ō 政 生活改善のためには重要である。 計画を提案したところで、 府 自分たちの暮している町や村で、 或る意味よりいえば、 の沈黙は政 策 0 上 して、 の矛盾というよりも寧ろ偽瞞に近いと考え 我々 日頃の要求を実現することこそ重 其を実現する上から の生活に直接 直接身ぢかなところより 真 面 目で善意あるどっさりの つなが どれほどの実益 握 l) 下ま の婦 って で 人代 0) 1 行 る 議 要で 政治 を 政 種 士 が、 ŧ 機 Þ

ある。 ら、 いる幣目 て今にも いう身ぶりをしても真実にはあらゆる方法をつくして大財閥 今日 原 原 内 日本社会機構の内部にはまだまだおびただしい反動の勢力が、 「なお 政 内 閣 権 閣 0) を信 無策と不誠意とは、 権力を保っているのは、どういう仕組 0) 橋 よりすべ 頼してい り落ちそうに見える現政 る者はい 既に な いのである。 人民のあらゆる層より批判されてい が府が、 このように、 一みなのであろうか。 あれやこれやと身をか の利益を守る すべ 千変万化して生きな ての課題をときか この答は、 ため る。 財 に わ 閥 熱 簡 中 解 なが 体 ね کے

られても弁解

の

余地は

なかろうと思う。

がらえているからである。

幸福は誰の手によって

婦人の一票が、明るい民主日本の将来のために、人民全体のよろこびのために、どれだけ 六三、三九七名が男子有権者である。これをみると婦人有権者の数は一割以上多い。 大事な意味をもっているかということを、 今年はじめて登場した婦人有権者は二○、九一七、五九三名であり、その残りの一八、一 さて総選挙は来る四月十日と公表された。 私たちは真心をもって理解しなければならない 有権者総数は三九、〇八〇、九九〇人である。 私達

と思う。

題、婦人だけで処理しなければならない問題というものを持たない。社会を作っている半 男女共通の問題として解決されようとするのである。 分の人々の悲しみ、 くわしすぎるほど、これまでに触れて来たとおりである。民主の社会では、婦人だけの問 日本の婦人の生活の有様は、どうであったろう。そして、今日、どうであろう。 困難は、はっきりその社会全体の幸福と不幸とにかかわることとして、 それは、

持法 れ った。 何 五年十月、 家たちは努力して来たことだろう。 三十三年に出 うことを思い た時、 半ば 度、 ここに極 それらの を撤廃せざるを得なくなった。 婦 封建的 婦 0) 人 8 解 悪 日本の支配者たちは、 人に対して政治的自 放運 法撤 人々 返せば、 であったこれまでの日本で、 て意義深 来た治安警察法第五条を撤廃させようとして、どれほど歴代 の 努· 動家に対 廃 0) 請願が議会に提出されただろう。 私たちは、 1 力は無視されたのであった。 教 訓が して、 あると思う。 由を束縛して来た治安警察法 深くこの事実をうなずくであろうと思う。 人民に対する敗北 同 せめて婦人が政治演説なりともきかれ 世界に類 性である婦人たちが、 , , くりかえし味うべき実例が わ のない ゆる婦 この自由 ところが、 の一つの大きい 人問題が、 L かし、 の 圧迫 種軽蔑と懐疑 運命はどうなっ 歴史は推移 どう扱われ それ 0) 根 しる は決 本的 あると思う。 しとして、 な悪 して、 0) し るように、 の婦 て来た 眼 て実現 例 法が を向 えば たであろう。 人 昨 解 治安維 か 撤 け 放 とい な 明治 廃 九 る 運 四 ほ か 動

を厭 とは ポ ツダ 自身の安逸だけである。 して ム宣言を受諾 る。 ない。 この人々にとって、 民主化 しても、 した日本 その事実を日夜目撃し、 本で、 日本 愛すべきものは日本でもなければ、 の現支配者たちは、 これまで自分たちがたのし 私たちの日々をその犠牲としている 決して正直に んで来る 日 た特 日 本 本 を民主化 Ò 権を失うこと

ことはすべての人民にとってもはや忍び難い苦痛である。

る丈の力量と理性とをもつものであることを世界に示すことは、 日本を民主化し平和の建設を一刻も早く成就させ、 日本の人民は己れの祖国を復活させ 私たちの強い念願 である

問題でもなければ、 性とを排除するために闘うということは、真心からなる一個の救 今日、 民主日本の甦りのために、 ましてや、時節柄という形容詞をつけられるような種類のことではな あらゆる人々が、 民主戦線に結集して、 国運動である。 封建性と反動 党派の

なければならない。 らせなければならないのである。 政 府が無能であるとき、 自らを救うことによって、愛する祖国を、 破局を救う何の実力ももたないとき、 人民のものとして生きかえ 私たち人民は自らを救わ

\ <u>`</u>

人は 主張とその主張の固執とがあるのであろう。 したことは私たちの鋭い批判を呼び醒したと思う。 こういう重大な意味をもつ日本の民主戦線の動きに対して、 いずれ も天皇制護持ということを唯一の旗じるしとしている。何故に、 もし真に日本を愛するのがその論拠であるな 進歩党、 自由党、 自由党が参加せず、 日本社会党の 此等の 人々 _ 部 と明言 の 0)

戦、 代議 彼等 だの いる。 の問 か。 らば、 上 望とをこめて、 か 0) 々 生 0) フランス その 題に 存 の護 第二次大戦を凌 士たちは、 利 現実はこのように切実に、 その姿には感動させるものがある。 益 地 0 愛する日本のあらゆる必要に応えて、 保証 持す 自分達 球 つ 代 何 は、 Ě 1 議 0) 故、 る本 0) 婦 士 は、 保守と封建と独占された富とを否定する民主化された日 その 人達は、 二度と戦争なき世界を創ろうとする熱意に充ちてい この人々にとって人民戦線はいらない、 0) あらゆる女性の真情と、 0) 体は、 新 深く考えさせるところがあると思う。 大部分が 民主日本のより合理的 胸 1 で来た、 いフランス人民 の中にどんな希いを持っているのだろう。 自身 今度初めて参政 この度の大戦による未亡人であるということは、 の特権である。 フランスの女性たちは婦 社会生活全般に亙る人民管理の必然に迫られ の光栄のために平和のにない手として働こうとして 沈着公正な精神を持 権を得た。 な社会建設のうちにしか見出 これに反して、 誠心誠意動くことこそ本来 そして三十二名の婦 喪服を着て立ったフランス 邪魔なことなのであろう。 人として最 私たち日 つあらゆ 彼女たちの希望は る 大 きれ の苦 ので 本 る 本 人代議 雄 0 0) の道では あ 七千 痛 々 な 火にはな V 7 0) 婦 V 中 V 0) 士を選出 万男女 男 人 な か 第 で この と政 らな 性 あ か よく 0) 次 人民 婦 そ 0) わ れ 人

戦争が 治運動をしなければならない。 オ放送をした。 このことは私達の真心にも触れる言葉である。 地球を血みどろにした第二次世界大戦が終ったとき、 絶対にない社会をつくるために、 彼は、 全世界の婦人によびかけた。 再びあなた方の家庭、 婦人達よ政治運動を起さなければならない、 世界の婦人達よ、 夫と兄弟と息子達とを奪って、 ローマ法王が、 一人残らず起って政 世界に向ってラジ 殺す

とを知り合ってい を失ったあらゆる子供たちの将来の安寧と幸福を築き守るものは、 るだろう。その何万人が、 日本に新らしく参政権を得た二千余万の婦人のうち、 る婦人たちの実行ばかりである。 息子を失った母であり、兄と弟とを失った女性であろうか。 何十万人が、良人を失った妻であ 共通の涙と奮起する心 父

実に自覚がなくて、 やすい藷の方がよっぽど欲しいといっていると。 婦 人参政 権 の問題がおこってより、 自分たちの参政権さえも却って厄介がっている。 お互によくこういう批評をきいた。 参政権などよりも、 日本の婦

けれども、果して、それが今日の現実であろうか。

人候補者達に多くのことを期待しないとはっきり断言している。 成程、 新聞 にあらわれた輿論 調査などを見ると若い女性たちは、 これは、 現在立候補している婦 寧ろ当然なこと

ので

ある。

的 だから女へ、 であると思う。 という言葉の な 責任 困 難 が を痛 か 綾で か 感し というような政治を思うよりは、 ってい 少くとも、 生存 てい ることを知 る。 0) 課題が 今日、 この歴史的難局を切りぬけるためには、 解か って 潔白に、 れな 1, る。 いことは、 まともに日々を暮してい 女のことを一番よく知って 幸、 今日 本能的に理解され の日本の女性は現実に醒 . る人 各自 7 、々は、 1 7 0 る る 票に 0) 0) は 現実 で 女だ 8 あ 極 7 め 0) か 破 7 女 大 局

らわ てみ 全人民が見切 から今日私たちの現実にもたらされているものは 届 家庭婦 これまでの政治に用はない、 れば、 と憤 され かな ない りをひそめた家庭婦人の 捨台 詞 こそ、どんなに、 いどこかで、 人たちが、 そこは決してただの無自覚といいきれない、 これ で澱 りをつけてい までの政治は一つも用がなくなってい んでいるのだと感じられる。 参政権よりも藷を、 見たこともない一 るかということの端的 と背を向けている二千万の婦人が、では、 握 というこころもちのうちに、 りの人々によって運営されて来た。 これまでの なあらわれ かかる結果である。 るのである。 「政治」への批判 「政治」は、 これまでの であると思う。 政治なん しずかに入って行 私たち 「政治」 自分たちの毎日 が言葉に 本当に、 かに 人民 そ に 0) 私た 用 0) 1 私た は 政 眼 **(**) な あ っ

民主化させていろいろの組合を管理して横流しを防ごうとしている努力と全く結び合った

うとしているこころもちは、私たち市民消費者が、すべての配給機構や町会を自主化させ

壊の苦痛を味っている。 条件とを求めているだろう。 連帯保証によって守られ、 なに主婦たちは、 て再び還ることのなかった良人をもつ妻たちは、どんなに、 の辛苦から脱け出たいと思っていないというのだろうか。それこそ全く反対である。どん 人間が生きるに足るだけの食糧の配給を願っていることだろう。 自分が安心して助ける場面と、安心して遺児たちを育て終せる 戦災者・復員者たちは、 日を経るにつれて骨肉を噛む生活破 自分たちの不安が社会全体の 出征

男女の学生は、 せめて一日も早く教科書をもって、 空腹でなく勉強したいと切望してい

る。

怪しげな官制農業会の手を経ずに、直接消費者に渡そうとしているのは当然である。 く送ろうとしていることも肯ける。工場の人々がゴム長靴から硫安までを熱心に増産しよ 工場の労働者が、今日企業家の行っているサボタージュに反して、 日本じゅうの農村に、 よりよく生産して、 人民の生活必需品を作り出し、農村の生産必需品を、 様々の形で、自主的な農民の組織が出来て、 生産を管理しより多 粒々辛苦の収穫物を、 少しでも多

ものである。

私たち人民が、 へと運ばれ得る条件を自分たちで作らなければならないということに帰着する。 いと思うならば、 家 庭 の婦人が、 人民の生活の向上のために骨折るに価する政治ではなかろうか。 それはとりも直さず、 一つでも配給をましにしようと思えば、 藷が道理に叶った筋を辿って、 謂わば藷一つも必要なだけ欲 村から各自の 台所

と、 十の字に、 ムがし ちのこころには、 うところ迄来た。 民の貯蓄は、 から昇りつめる けれども、 去る二月十六日午後から、 のぼ が れた。 りつめて、 ぶっちがえになる。 モラトリアムの噂がひろがり、 昨年末から、 のに、 瀕死の 数々 モラトリアムをしくしか、 二本の線を、 体温 の 病 疑問が: 人の体温表をみると、 は、 大干潮のように減少しつづけた。 日本にはインフレーション防止非常措置として、 医者は、 生じた。 命数のつきるにしたがって、 もすこしのばせば、 これを致命的危険のシムボルとするのである。 政府のうつべき手はなかったのである。 それが実現したニュースをきいたとき、 脈搏の数は益々多く、 其は完全な十の字となってぶっちが 低く低くと衰えて来て、 反対に、 物価は、上へ、上へ 高く高くと青線は モラトリア 終に 私た 下

モラトリアムをしかなければならなくなる迄に、 政府は、どんなことをして来たか。 疑

問というのはこのことなのである。

されてから後、 ちたちは、 を公表したりした。 ョンは増大したのであった。 さきにふれたように、 十分脱税の方法と、 それらの人々の濫費のために、 しかし実行に着手しないで、 政府はインフレーション防止という名目で、 財産隠匿をする時間を与えられた。 目に見えて物価は高くなり、 時を過して来た。 この間に、 事実、 戦時利得税、 この税案が インフレ 財閥 財産税 公表 金も

が独占された事実を指摘したのであった。これが、 閥たちは、手持ちの厖大な金額を、 ムが公布されたとき一般の市民は忽ち小額紙幣饑饉で大困難をした。 いざモラトリアムが公布されるという前日、 <u>五</u>. 各新聞 円札も封鎖されることを公表したのである。 の投書欄は、 政治的醜聞として、その公表前に、 封鎖洩れとされていた五円紙幣に代えた。 殆どすべての銀行で、 事実であった証拠に、 部の人々によって小額紙 モラトリアム第 政府要路の人物、 政府は、 モラトリア 周章 日 財

それぞれ の新聞が、 モラトリアム家計の設計をのせた。同じように次の式をのせた。

手持現金旧券+(新円100円×家族人数) +500円以内の給料+300円+(100×X)

出来て、 に、 は、 とって来て、 旧 家庭 一券は、 家 庭 これ迄よりよいという風な解説が、 の頭かずだけ一人宛百円ずつ引き出せる。 の人数当に一人百円ずつ新円にかえられる。 それがどれほどどっさり在ろうとも貯金して、 不足のときはその主人 (世帯主)が、 どの新聞にも出されたので 其故六人家族ならば千二百円 三百円までの貯金をひき出 それに、 (封鎖されて) 主人が五百 あっ 手持現金とし 円ま た。 『せる。 で 0) 0) 生 月給 それ が を

落付 たので、 式は余り明瞭に、 いて考えてみると、この式は、 私た ちは何となしそれを自分たちの実際だと勘ちが まるですべての人の生計がそっくりその通りである 何と魔術の式だろう。 **(**) しそうであった。 かのように示され か

先頃、 いることが発見されるのである。 を覚えている。 第 て其がモラトリアムの下では、 決し 政 府 **,** , が て其額にも達していないことを物語ってい つ の間 男子三十歳 最低として四百 に日本じゅうの給料が、 五十歳、 五十円がきめられたのであってみれば、 全人口の僅か何割かを占める少数者の給料を代表して 最低賃銀四百五十円、 五百 円平均と定ったのだろう。 . る。 五百円の最 女子百五十円と発表したこと 高給料と 実際 私たちは、 の 給 嵙 0) 大部

紙をつけ、

三月三日という暦をはぎとった。

銀は、 れば な 像する人があるだろうか。 い軍 な 軒 るま モラトリアムになってさぞ暮し難かろうからと、 の世帯主が婦人であることは、 V) 海外在留民 この場合、 の家庭が、 最低百五十円と、 婦人の勤労によって支えられていることは普通とし 今日ざらだと思う。 男の三分の一にきめられた婦 男子並に引上げられるもの 戦死者の未亡人、まだ帰 人の差別 的な賃 つて来 なけ 想

家内の家庭で、 た人が多い されることとなった。このとき、 手持 人宛百円ずつ預金を引出せるときくと、その金は、 現金は か。 一人宛百円ずつ家族の頭数だけ新円に代えられるということで、 それとも、 旧円が使える間の生計費をさしひいたあと、 人数を掛けただけの百円を揃えかねた人の方が多か 私たちの周囲には、どんな現象が起っただろうか。 誰にでもあって、 現金で六百円並べてすぐ代え 誰 か 隣組 った がちゃんと に登録 六人

金が 私たちのために用意してでもいてくれそうな錯覚をもちかねない。けれども、 こういう疑問にみたされながら、 :干上ってしまった赤字破局だからこそ、 一人百円ずつ引出せる、 といわれても、 私共は従順に、 モラトリアムはしかれたのではな 引出す金はもう大体において尽きている。 十円札に小さい皮肉な膏薬のように貼 現実に、 かっただろ 預

十五.

円のものが

十円に下った程度であるとも報じられ

てい

る。

今度から約三倍の値上りをした。 旧 券封鎖で、 物価はどうなるかと、 町会費も、 目をみはって来る日を迎えた。 今月から三倍になった。 省線 配給 にな に乗っ った米は、 たらば

とぶようにうれて、 一十銭区間が 四 十銭になり、 やすいものは売れないと、 三円 0) 回数券は、 新聞は報じてい 九円である。 闇 る。 市場では、 やすいものといっても、 ミカンや汁粉は、

と信じる。 かれてゆく。 水道十二倍、 全く私たちの生活は、 生活は、 ガス六倍の値上げが予告されている。 どうなるのだろうか。 どうなるのだろう。 今日そう思わない人民大衆は一人もあるま 私たちの眼は、 大きく大きくと見開

三月 匹 日 の新聞 は 月五 百円 \neg 当局 の家計簿』 標準は都会五人家族」 という記事を出

た。

れ、 みる 日 本の 人々 は み出した二人の人間、 は、 その 人口統計では、 両親、 お のず 年よりまでを加えたら、 から肌に粟を生じはしないだろうか。 家平均の子供数五人とされてい 或は三人の人間は、 何人家内になるであろうか。 何で生きて行くという 子供だけでさえ五人平均 たのを思い起して、 「標準」なのであ 標準」 この から 記事 とする を

児誘拐も報ぜられ 四月十日の総選挙をめざして、各政党が、 これらすべての危期が、 これらの記事と並んで、 てい る。 愛する日本を覆い、 天然痘、 同じ紙面に、 発疹チブスの危険も全市にひろがろうとして 新円六十万円の泥棒。 どう党費をまかなっている 私たちの時 々 刻々を脅かして 若い娘の失踪六十一名。 か、 いる 国 民 0) , , 的監 で ある。 幼 視

の生活が 君主は、 破壊されている光景を前に、 この波瀾 万丈の日本全土を巡って、 人民投票をさせようとしている。 自身の宣戦によって戦争が引起され、 全人民

が必要」

と云われ

ている。

十五億九千万円の動産と百三十五万町歩の土地とをもつ日本の

闘争力をもっている。 を欲している。 生きようと欲するのは男だけの希望であろうか。子をもっている雌虎は、 美しく幸福なわが日本に、 このことは、どんな猟師も知っている。 よろこびをもって生きることを望んでいるので 私たち婦人は、 雄よりも強い 生きること

ないと思って来ているのは、理の当然ではないだろうか。 人まかせにして、今日の破局が生じている以上、私たちが、 もう人まかせにはしておけ

ある。

授産所一つ作られないことが、わかって来たのは必然であると思う。 人民 のため の人民共和の政府がもたらされなければ、結局、 婦人のために保育所一つ、 モラトリアムと生活

あ

る

だろう

か

戦災 費値 軍需· もう十分儲け T 産業補 者 上りの恐ろし 0 生計立て 0) 償 金が た軍 政 いばか 直 あるならば、 需成金を猶この上にも補償して、 府 たは、 L のために、 まだ、 りの食 その金こそ、 軍需産業補償のことをいってい V ちが 公明正大に支弁されるべきだと思うのは いによって、 戦死者未亡人その家族の その裾わけにあずかろうとし 人民生活は る。 極限 封鎖 へ追 生 計 U 1 保償 た人民 つめられようと 誤 0) つ た 7 た考えで 0) め 金

めで なら は、 封 の従業員 れていた。 今日、 だが、 つない、 あるとされ 飛 五. + び上った。 が、 銭 私たちは、 日本には五百八十三万人の失業者があると、 と 八十三万人は、 \mathcal{O} V 値 生計 ・う共通 7 Ë い 昔から辛棒づ 費 げを考えてい る。 の値上 注意ぶかく、 の必要か りに 三月までに就業する見透しであると報じられて る 5 耐え ょ 事 1 のである。 かね 社会勤労者の代表である逓信従業員が、 0) 困難な対立に入った。 いきさつを見守る必要があると思う。 て待遇改善の要求をした。 理由は多額となった支出をま モラトリアム公表の日 逓信院では、 そしたら、 ハ かな ガキ二十五 V の新 生きな 例えば、 ってゆくた 玉 聞 鉄 け に 0) 運 か れ 玉 ば 鉄 か

逓信従業員たち、 玉 鉄 の働く人々の生活の実体は、 何たる悲劇的めいたものとなるだろ

彼が う。 的 理解 も 者たちは な 勤 をも う風な、 場 め 面 知 つ T に 人 そ 働 7 0) いる男女の従業員は、 Ō 其々 く勤 知らなければならな 安否を問 要求を拒絶 0) 務者が、 部門で い合われ 出来 の値上りとして反映させることである。 私たちと全く同様な生活の必要から一 せる な 幾らか **,** , い代り、 枚 重大なことがある。 め ハガキは二十五銭になる。 の割増し 忽ち、 しのつい その結果を、 それ た給料を家 は、 般 定の要求 工場、 更に へもちかえるとし 市民これを見よ、 官庁そ 私 をすると、 たちが、 Ō 他 0) 周 当事 T 公 到 共 な

に好 勤労者、 分らないとい 都合なことはない。 農村 う口実に と都会との対立を生むならば、 つ か 何 **,** , 故なら、 、得る のであ それを日本人民には、 これほど反動 自治 のよみがえり、 の能力、 民主 尃 一の方法 制 支配 が 0) まだ 復活

官僚的、

財

閥的

なこういう技術が、

も

し私たち人民に仲間

わ

れをさせ、

般消費·

市

民と

た線 1 今日 0 出 そ 小 · 来な 0) ある人々は皆正当な、 ために、 ければならない事を痛感してい 秩序と組織 合理的 性をもって、 で平和 町 的な人民の食糧管理が大切であると、 か ら 村 村から町 へと民主的に統 一され 考えて

定までこしらえた。 政 府 は 不手際な強制供出方法によって供出を拒んだ農民は投獄されなければならない 都市消費者が、 供出しない農民を怨み、 窮した揚句に都市内が騒が 規

時、 て認 しま 出 も革 原動力とならなければならない関係に立っているのである。 させて置か たちがこの日本を民主化 あるだろうか。 くでもなるとしたら、 いう過程 ような理論をつくり上げて くしながら、 |鎮圧し 発 ブル 主化 命的 0 めることさえし 初か なけ してゆ な ジョアジ な 今日 なかっ 0) ら封建的であっ ŧ Ŏ で れ 虎視眈々 或る種 Ź あ ば のように誇張 0) 発展 日 たというところから起って るけれど、その ならな が、 本 得なか どういう結果になるだろうか。 と機会をうかが 0 0 の民主化は、 似而非 能 半ば い」口実を、 しなければ た支配階級は、 いる。 った社会の半 力を失ってしまってい 封 し 建的 て、 政治家は、 初 歴史の必然のな 8 明治にやりのこされたブルジョア民主主義化 な自身の ならないという今日必然の条件は 日本 ってい Ō 人民自ら呈供するほど、 封 担当者は先にくりかえしふれたように、 の民主化の今日 そのまま自身の特権を守って益 建 食糧その他の いる。 る旧軍閥、 の性格が、 歴史性から中途半分にし い る。 婦 その動揺こそ、 従って、 人を、 観念の社会主義 反動者 今日までのこって の段階を無視 人民管理委員会というも 男子と等し 新し 今日 いのつか V) (i) 白本 勤労人民階級がその か 今は表 し むところとな \wedge た二 挑 日 V 日 社会 々 , , 本 発 本を近代 0 反 る 0 U 重 民 面 衆は からである。 の成員とし 明 7 権 から姿をか 動となって の完成 治 もう自身 V 力 0) 民主化 を い 無智 維 新 私 う z で

民主戦線とい i, 人民が自身 の幸福 への道として民主なる共和政府を設計することは、

一つの社会発展の足どりとなって来ているのである。

て上 りが に方 円は りな ろい全般 現支配者たちがひきおこした戦争惨禍の責任を糊塗しようとして、 子供たち自身 まされた。 考えよう。 て 細 一げら 燃え 便によって 五. 産児制 々 今日 人 家族 る とい との繋りであらわれていないも ので 今日、 戦 (J) 7 る社会の条件、 限 嵵 日常 0 の輪 う架空の 私たちが 「標準」 ある。 幸 中、 翻弄されるとき私たち婦 生活 福 同じ は、 婦 のために、 とい 生め 女性は何とい 母性はゆたかに、 婦人として感じ、 に 人たちは 天国は、 即 われ ţ 施設をこそ、 した要求 何とい 科学的な調節 地上には ている。 殖えよ、 が、 わ れ わ 女性の 愛ら のが な それ 女性は求める。 人の胸 と云った権力のその面 7 れ 婦 いるだろう。 ただろう、 **,** , 人の特色ある社会性としてい の自由はなければならない。 のである。 あろうか。 を無くしたい 性そのものの自然さ、 い子供たちは地にみちて、 にはほとば あのように、 それ 婦 女性という性に即 日本の人口問題は 不如意 しる熱い思 人だからモラトリアム 故にこそ、 前 で闘 の一つとして、 政府の無能を彌縫びほう 生めよ、 わされ 高貴ささえこのよう 1 われ 母性 が 私た あ 重大で し る。 0) か 7 殖 た実例 て来た。 ち婦 保 えよ もそれ ある、 に る。 大きく 純 を一 か 潔 として、 ĺ を育 と励 けれ か な 五. 怒 ij 百 ح つ わ

云々する産児制限に、 決して無条件に母なる肉体をさらそうとはしな V 0) で

る。

めに、 を逆用 を、 ふり払って、 なければならないのである。 ているし、 の日々であるからこそ、 らこそ、ひとしお、 今日の私たち日本の人民は、 した穢 杯に活かそうと思っている。 まめに、 穢 い手が 無限の若さを、 自分 1 うまずたゆまず、 手から奪 わたしたちの肩 の道を進まな わがふるさとを、 おのお V かえされて、 その最後まで惜しまず新しい日本のために注ぐことを切望して に いものがあろうか。 のの生を厳粛に自覚し、 日本の生活がこのようにも艱苦にみち、 昔ながらの温かさに今日の叡智と覚醒とを添えて、 か けられたとき、 そのために、すべての婦 深い心に抱きとっていると思う。 自分と自分の愛するすべての者 婦人はどうするであろう。 日本婦人のやさし 新し い民主日本 人は事理明 い雄々しさは 建設 白 引裂 0 のため 九四六年四月〕 幸 であろうと願 福 か 0) その手を、 に た れ 0) 確立 其 8 7 7 0) 0) それ 働 0) 価 犠 る か た か 値 牲 つ

青空文庫情報

底本:「宮本百合子全集 第十五巻」新日本出版社

1980(昭和55)年5月20日初版発行

1986(昭和61)年3月20日第4刷発行

底本の親本:「宮本百合子全集 第十二巻」河出書房

1952(昭和27)年1月発行

1946(昭和21)年4月発行

初出:「私たちの建設」実業之日本社

入力:柴田卓治

校正:米田進

2003年6月4日作成

青空文庫作成ファイル:

ました。入力、 このファイルは、インターネットの図書館、 校正、制作にあたったのは、 ボランティアの皆さんです。 青空文庫(http://www.aozora.gr.jp/) で作られ

私たちの建設

宫本百合子

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL http://www.aozora.gr.jp/

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL http://aozora.xisang.top/

BiliBili https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/ ※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。 http://tokimi.sylphid.jp/